

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1987年度

1988年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は、大阪平野の東南部、奈良県との境に位置し、市域の3分の2は山地である。市内中央部を流れる大和川は、石川を合わせて堺に向かい、まさに山と川のある町として、豊かな自然に恵まれている。

江戸時代以前、大和川は、柏原から北に、次いで北西の方難波に向かって流れていた。古代には、瀬戸内海は、日本にとって文化の導入管であり、大陸の文化は先ず難波津にもたらされ、大和川を遡って大和に流入した。したがって石川と合流する柏原のあたりは交通の要衝として、大和朝廷にとっても殊の外重要な地域であったのである。こうした水や緑豊かな自然環境は、さらに古く原始時代にあって人々の暮らしにとって大切な地域であったと思われ、太古からの人々の息づかいが感ぜられる遺跡が多く残されている。

近年市内各所で、住宅地等の開発がすすんでいるが、わが柏原の地が文化史的に重要な役割を果たしてきたことを誇りに思い、文化財を大切にしていくなければならない。については、柏原市教育委員会が毎年報告している発掘調査報告書をより多くの方々にご覧いただき、柏原市における埋蔵文化財の現況を御理解いただくとともに、今後とも遺跡の保存に御協力たまわらんことを祈念するものです。

1988年3月

柏原市教育委員会

教育長 崩刀和秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が国庫補助事業（総額5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化係文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、北野 重、安村俊史、桑野一幸、森島 康雄、石田成年を担当者とし、昭和62年4月1日に着手し、昭和63年3月31日に終了した。
3. 本書には、文化財保護法第57条の2に基づく届け出があった178件のうち、昭和62年1月1日から12月31日までに着手した、土木工事等に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施にあたっては次記の方々の参加、協力があった。

石田 博	松井隆彦	奥川滋敏	谷口京子	薮中優香	松下 修
竹下彰子	津田美智子	秋田大介	伊藤芳匡	稻岡利彦	今中太郎
岡田嗣生	近藤康司	田中國雄	西 一晃	本多恵治	前田耕司
青木久美子	乾 優世	尾野知永子	出口美佐子	本多富子	松井美保子
南 ゆう子	井上岩治郎	奥野 清	奥野義夫	谷口鉄治	分才春信
道旗甚蔵	森口喜信	飯村邦子	竹下真紀	乃一敏恵	村口ゆき子
横関勢津子	吉居豊子				(順不同・敬称略)

5. 本書の執筆はそれぞれの担当者が、監修は竹下が担当した。
6. 本書で使用した標高はT.P、方位は注記のない限り磁北である。
7. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライド、ビデオテープを作製した。また出土遺物は、写真、実測図と共に当市教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行なっている。

目 次

は し が き

例 言

目 次

1987年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧（国庫補助事業）

1987年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

第1章 大県遺跡	1
87-2次調査	1
第2章 平尾山古墳群	5
87-2次調査	5
第3章 安堂遺跡	18
87-2次調査	18
87-3次調査	22
第4章 原山遺跡	23
87-1次調査	23
第5章 田辺遺跡	26
87-5次調査	26
87-6次調査	28
第6章 国分尼寺跡	30
87-1次調査	30

図 版

1987年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

柏原地区

(国庫補助事業)

遺跡名	所在地	面積 m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
青谷廬寺87-1	大字青谷159-1の部	99.84	富田小太郎	農業用倉庫	石田	2・16	1.5×4 mトレンチ 遺構・遺物なし
大県87-1	平野1丁目14-1	757.14	児玉榮一	個人住宅建設	北野	2・26	3.5×4 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
平尾山87-1	大県4丁目19	152.81	田中正教	個人住宅建設	安村	2・28	2×4 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
平野87-1	山ノ井町573	614.95	山本勝男	共同住宅建設	安村	4・8～4・10	2×2.5 mのトレンチ設定 遺物が少量出土、遺構なし
大県87-2	平野1丁目119の一部	133.29	森山実夫	個人住宅建設	安村	4・15～4・17	本書掲載
山ノ井87-1	山ノ井町717番地の一部	88.295	西村重則	個人住宅建設	北野	4・23	1×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
平尾山87-2	大字青谷2272-4	13100	蓬来谷清掃(株) (代)蓬来谷美代治	廃棄物の埋め立て	安村	5・6～5・25	本書掲載
高井田横穴87-1	高井田553-1	544.560	奥野義造	個人住宅建設	石田	6・10	3×7.5 mのトレンチ設定 埴輪少量出土、遺構なし
大県87-3	平野281、282	365.61	山口治朗	個人住宅建設	石田	6・12	2×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
船橋87-1	大正1丁目613-2	308.407	南 昌孝	共同住宅建設	北野	6・18	2×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
安堂87-2	安堂町664-1	406.46	(株)ナイス	店舗	石田	6・25～6・27	本書掲載
平尾山87-4	大字雁多尾畠3079	9105.59	高津定治	農地改良	石田	10・5～10・7	120m ² 遺構・遺物なし
大県87-5	平野2丁目280-1	120.39	堺 賢治	個人住宅建設	石田	11・9	2×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
安堂87-3	安堂町919-2	239.21	木南吉雄	個人住宅建設	石田	11・11～11・12	本書掲載
平野87-2	平野2丁目467-3	132.67	上田好邦	個人住宅建設	石田	11・16	2×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
本郷87-1	本郷2丁目872	503.55	柏元 眞	共同住宅建設	北野	12・8	2×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし

国分地区

遺跡名	所在地	面積 m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
田辺87-1	田辺2丁目4584	406.47	稻山 勉	個人住宅建設	石田	2・12～2・14	2×7 mトレンチ 奈良時代の遺物少量出土、 遺構なし
玉手山87-5	旭ヶ丘1丁目448-4	153.02	岸本 諭	個人住宅建設	北野	3・18	1.5×2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
玉手山87-2	旭ヶ丘1丁目436-1他	462.91	神慈秀明会	事務所建設	安村	3・27～3・28	5×5 mトレンチ 遺構・遺物なし
玉手山87-1	旭ヶ丘1丁目448-4の一部	680.44	八幸産業(株)	分譲住宅建設	安村	3・25	2×2 mトレンチ 遺構・遺物なし
玉手山87-4	国分町大字円明874	20978.04	光洋精工(株)	社宅建設	北野	4・15	3×3 mトレンチ 遺構・遺物なし
田辺87-2	田辺1丁目375-7	213.410	前川清和	個人住宅建設	石田	4・23～4・24	2×6 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
玉手山87-3	玉手町115番124	168	天羽楳英	土砂採取	石田	4・27	4×6.2 mのトレンチ設定 遺構・遺物なし
国分尼寺87-1	国分東条町2581-2	207.17	今西康裕	個人住宅建設	北野	5・19～5・20	本書掲載
田辺87-4	国分本町6-1461-2	84.88	青山清一	個人住宅建設	石田	6・8	2×4 mトレンチ 遺構・遺物なし

遺跡名	所在地	面積 m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
原山87-1	旭ヶ丘3丁目4823-2、4の一部	522.53	松葉 明	個人住宅建設	安村	8・3～8・7	本書掲載
田辺87-6	田辺2丁目2065-1、2066-1	299.50	辰巳秀夫	個人住宅建設	石田	9・7	本書掲載
田辺87-5	国分本町6丁目3-16	208.26	小原工業(株) (代)小原保男	個人住宅建設	安村	7・14～7・15	本書掲載

1987年度 柏原市内遺跡群立会調査一覧

柏原地区

遺跡名	所在地	面積 m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
高井田横穴古墳群	高井田813	143.760	大阪府立 修徳学院	教護院建設	北野	1・10	柏教文61.3-45 遺構・遺物なし
大県南遺跡	大県4丁目381-5	125.56	山田光次	個人住宅建設	石田	4・8	柏教文3-10 遺構・遺物なし
大県遺跡	平野1丁目96-5～12	472.65	国陽開発(株) (代)吉村 亨	個人住宅建設	北野	5・26	柏教文3-8 遺構・遺物なし
平尾山古墳群	平野2丁目3-1	8.0	関西電力(株) 羽曳野営業所	電柱建替	石田	7・7	柏教文61.3-42
平尾山古墳群	大字高井田230	144	市長・山西敏一	擁壁工事	安村	10・28	柏教文3-25 遺構・遺物なし
鳥取千軒遺跡	青谷401～2他	286.3	柏原市水道局	配水管布設工事	北野	11・16	柏教文3-29 遺構・遺物なし

国分地区

遺跡名	所在地	面積 m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
玉手山遺跡	旭ヶ丘2丁目302-6	141.03	福田忍・宮崎智子	個人住宅建設	北野	1・13	柏教文3-1 遺構・遺物なし
田辺遺跡	田辺2丁目2010-7	17.11	共新開発(株)	個人住宅建設	北野	2・9	柏教文61.3-47 遺構・遺物なし
田辺遺跡	田辺2丁目2010-7	63.15	新栄開発(株)	個人住宅建設	北野	2・9	柏教文61.3-50 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	旭ヶ丘1丁目449-6	116.306	服部則一	個人住宅建設	北野	2・26	柏教文3-3 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	円明町100-37	2144.42	高砂薬業(株) (代)畠山千代治	工場建設	石田	4・13	柏教文3-5 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	円明町100-35	1248.97	高砂薬業(株) (代)畠山千代治	工場建設	北野	5・2	柏教文3-14 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	旭ヶ丘1丁目449-7	143.850	山田住宅(株) (代)山田正太郎	個人住宅建設	北野	6・10	柏教文3-9 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	円明町100-110	923.33	酒井製鐵所 (代)酒井憲二	工場・倉庫・事務所・建設	北野	6・25	柏教文3-19 遺構・遺物なし
原山廃寺	旭ヶ丘3丁目4842-2	346.5	石崎資材(株) (代)石崎 昭	事務所建設	北野	6・29	柏教文58.1-43 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	旭ヶ丘2丁目369-32	134.41	浅野久治	個人住宅建設	北野	8・17	柏教文3-17 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	円明町421-2～415	66.66	柏原市水道局	水道管埋設	北野	8・18	柏教文3-27 遺構・遺物なし
田辺遺跡	国分本町6丁目1453他	118.38	柏原市水道局	水道管埋設	北野	9・7	柏教文3-28 遺構・遺物なし
田辺遺跡	国分本町7丁目2-2	248.24	大石紹嗣郎	個人住宅建設	北野	11・13	柏教文3-26 遺構・遺物なし
玉手山遺跡	玉手町260-2、261-2	243.47	田口史郎	個人住宅建設	北野	12・25	柏教文3-30 遺構・遺物なし

この一覧表には昭和62年度国庫補助事業として計画、実施した発掘調査のうち、昭和62年度1月1日～12月31日の間に着手したものを探載している。

第1章 大 県 遺 跡

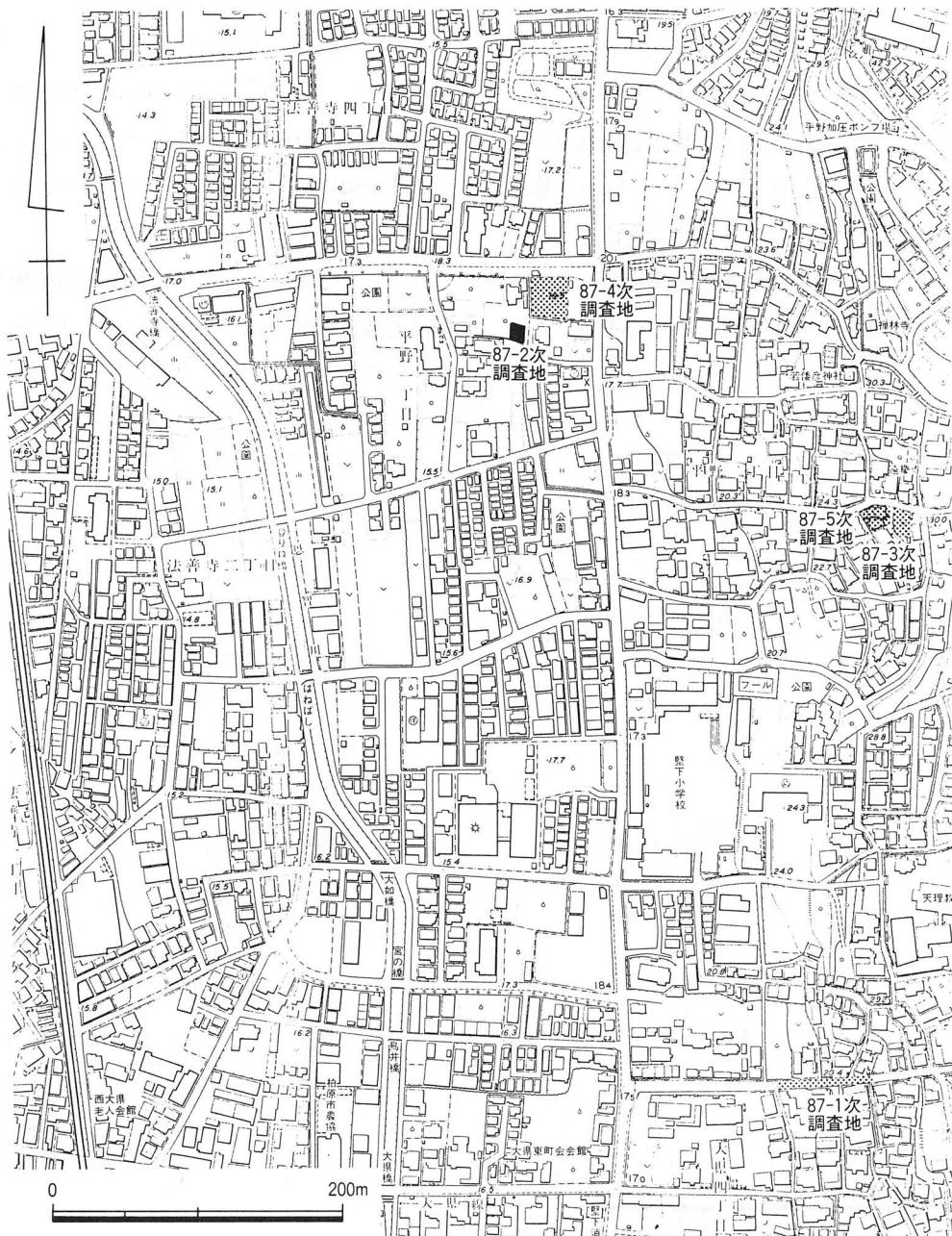


図-1 調査地位置図（方位は真北）

87-2次調査

- ・調査地所在地 柏原市平野1丁目119
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1987年4月15~17日
- ・調査面積 $4\text{m}^2 / 133.29\text{m}^2$

建物予定地の南東部に、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のトレーニングを設定し、調査を実施した。現況はぶどう畠の跡地を整地しており、地表面の標高はT.P. 16.2mである。地表面から40~50cmの深さまでは盛土、耕作土、床土の土層がみられ、ぶどう畠利用される以前は水田であったようだが、水田利用の時期は確認できない。また、盛土内には土師や須恵器の小片が含まれており、他所の遺跡の土で盛っているようである。

それより下層には灰褐色~黒褐色の砂質土がみられ、6~8世紀の土器を含む遺物包含層であるが、各層の時期差は認められない。なお、淡黒褐色砂質土層からは、かなりの湧水が認められた。



図-2 調査区位置図

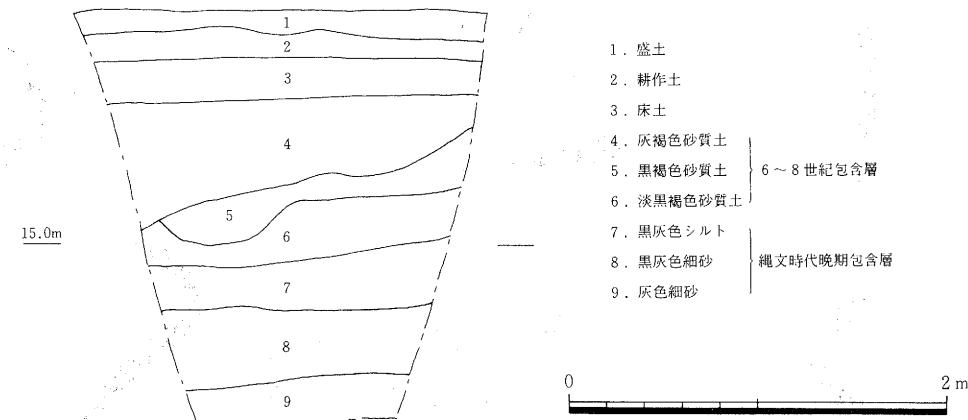


図-3 調査区北壁土層図

更に下層は黒灰色～灰色のシルト、砂層となっており、縄文時代晩期の遺物のみ含む遺物包含層である。

淡黒褐色砂質土上面には遺構とも考えられる溝状の落ち込みが確認されたが、調査区が狭く遺構か否かの確認はできない。他の土層上面では遺構は確認されていない。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト剝方等が出土している。

縄文土器は晩期の土器のみである、黒灰色シルト層からその大部分が出土している。遺物はいずれも小片であり、良好な資料は少ない。1～5はいずれも深鉢の破片であるが、他に浅鉢の破片やサヌカイト剝片が出土している。1は深鉢の底部。あげ底である。2～5は口縁部。2は内外面共にナデ調整。3・4の外面は二枚貝条痕が残る。5は口縁部に刻み目が施され、口縁直下に貼り付けられた断面三角形を呈する凸帯にも刻み目が施される。1～5は、いずれも胎土に雲母・角閃石を含み、黒褐色～褐色の色調である。

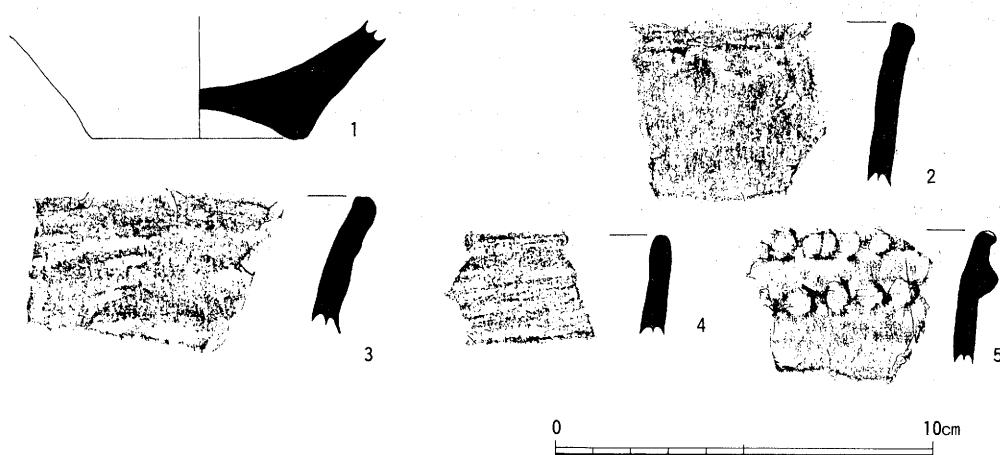


図-4 縄文土器実測図・拓影

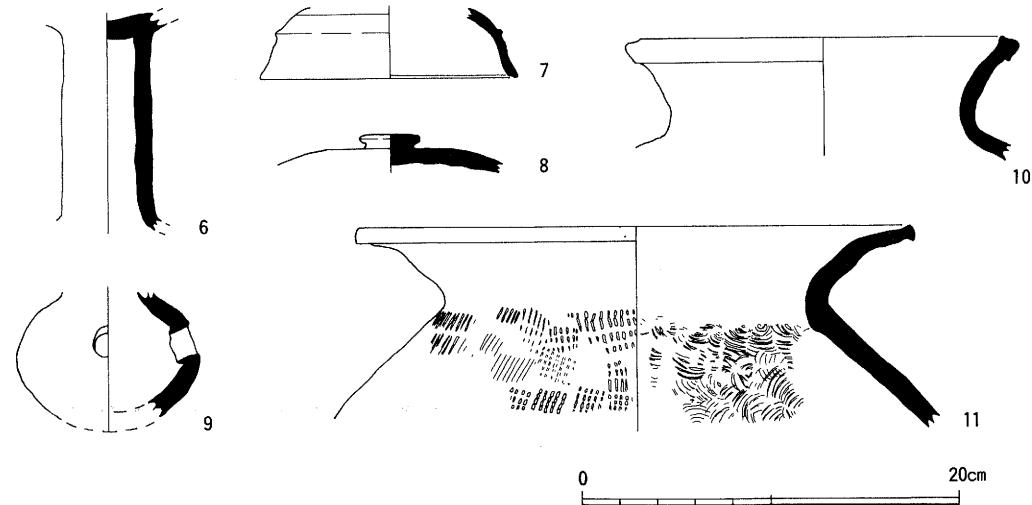


図-5 土器実測図

6は弥生土器。中期の高杯脚部である。弥生土器は1点のみであり、他に出土をみない。

7～10は須恵器。7は杯蓋。稜線は鈍い。8も杯蓋。扁平なつまみを伴う天井部の破片である。9は壺の体部。外面には全く施文されていない。10・11は壺の口縁部。10の口縁部は端部で肥厚し、11の縁部は強く外反し、端部でやや垂下する。11の外面は平行叩き目をスリ消しており、内面には同心円の当て具痕が残る。

須恵器は6～8世紀のものが出土しており、土師器はほとんど出土していない。遺物の量はあまり多くないが、比較的良好な状態で残っている遺物が多い。また、6～8世紀の遺物を含んでいることから考えると、近辺、おそらく標高の高い調査地東側に存在したと考えられる集落に伴う2次堆積の遺物であろう。

建物の基礎深度は現地表面より約30cmであり、遺物包含層に達することもないと考えられたため、調査範囲は拡張せず、建物の建設を認めた。今回の調査地周辺では過去にも調査を実施しており、それらの調査結果から遺物包含層の深度は地表下1～2mであろうと考えていた。ところが、最も浅い部分では地表下40cm前後で遺物包含層に達することが確認され、かなり遺跡の深度に差がみられることが確認された。また、縄文時代晩期の遺物のみを含む遺物包含層が確認されたことも大きな成果であった。

第2章 平尾山古墳群

87-2次調査

- ・調査地所在地 柏原市大字青谷2272-4
- ・調査期間 1987年5月6日～25日
- ・調査面積 $80\text{m}^2 / 13,100\text{m}^2$
- ・調査担当者 安村俊史

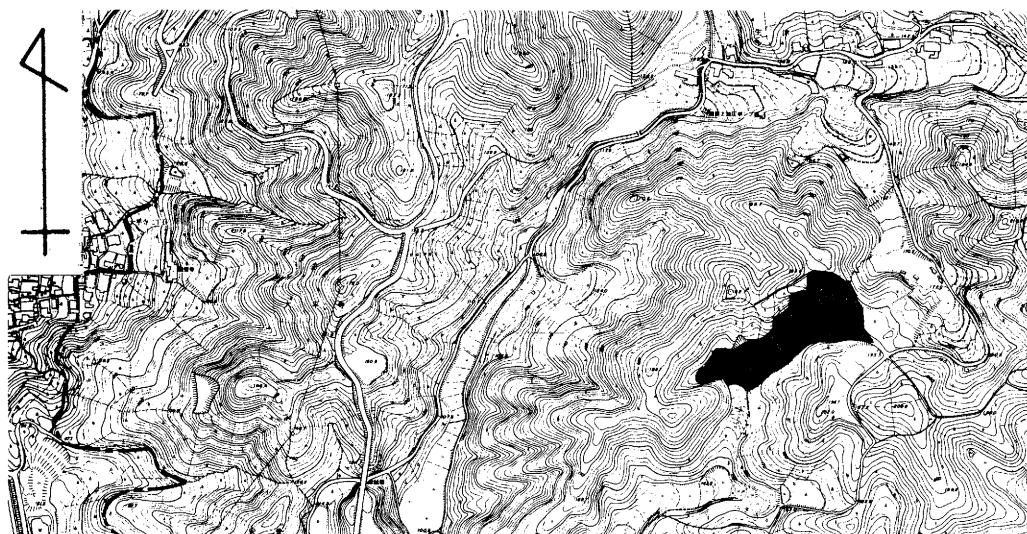


図-6 調査地位置図 (1 : 10000)

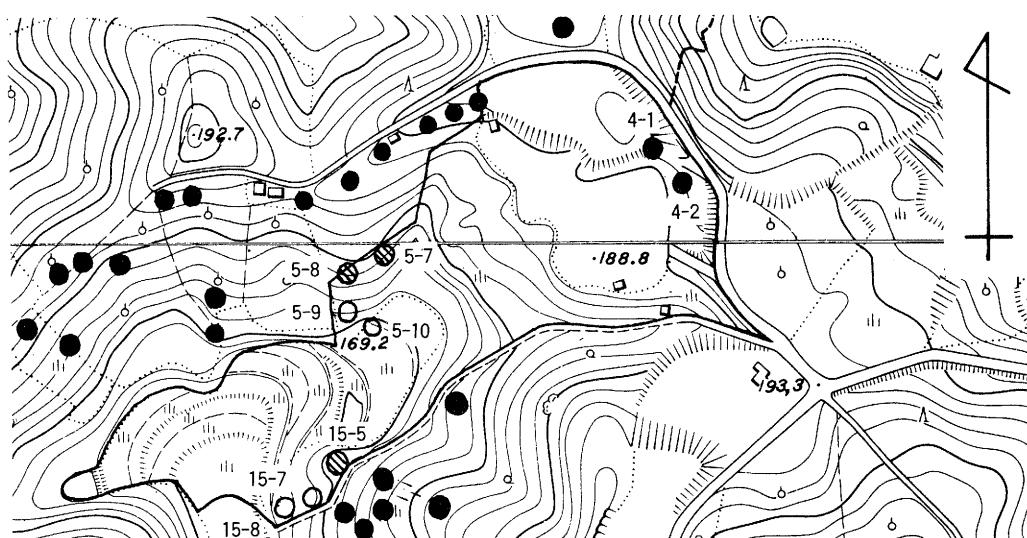


図-7 調査地周辺古墳分布図 (1 : 2500)

1987年3月に、市民から平尾山第5支群12号墳（横口式石槨墳）の周辺で大規模な造成が行なわれていると大阪府教育委員会に連絡があった。そのため、大阪府教育委員会松岡良憲技師と柏原市教育委員会竹下賢、安村が現地を視察し、蓬来谷清掃株式会社による廃棄物埋め立てが行なわれていることを確認した。当該地は平尾山古墳群平尾山支群にあたり、指摘のあった第5支群12号墳には影響が認められなかったが、既に第4支群1・2号墳は埋め立てられているためか確認できなかった。

そこで、蓬来谷清掃株式会社に連絡をとり、発掘届の提出を指導する一方、埋め立ての計画についての事情説明を求めた。その結果、埋め立て予定地には先述の第4支群1・2号墳のほかに第5支群7～10号墳、第15支群5・7・8号墳が含まれていることが判明した。そして協議の結果、第4支群1・2号墳については蓬来谷清掃株式会社の重機提供によって調査を実施し、他の古墳は現状、あるいは埋没保存の予定であるため、国庫補助事業として墳丘の調査・測量、石室の調査、実測等に着手することにした。



図-8 平尾山第5支群7・8号墳周辺地形測量図

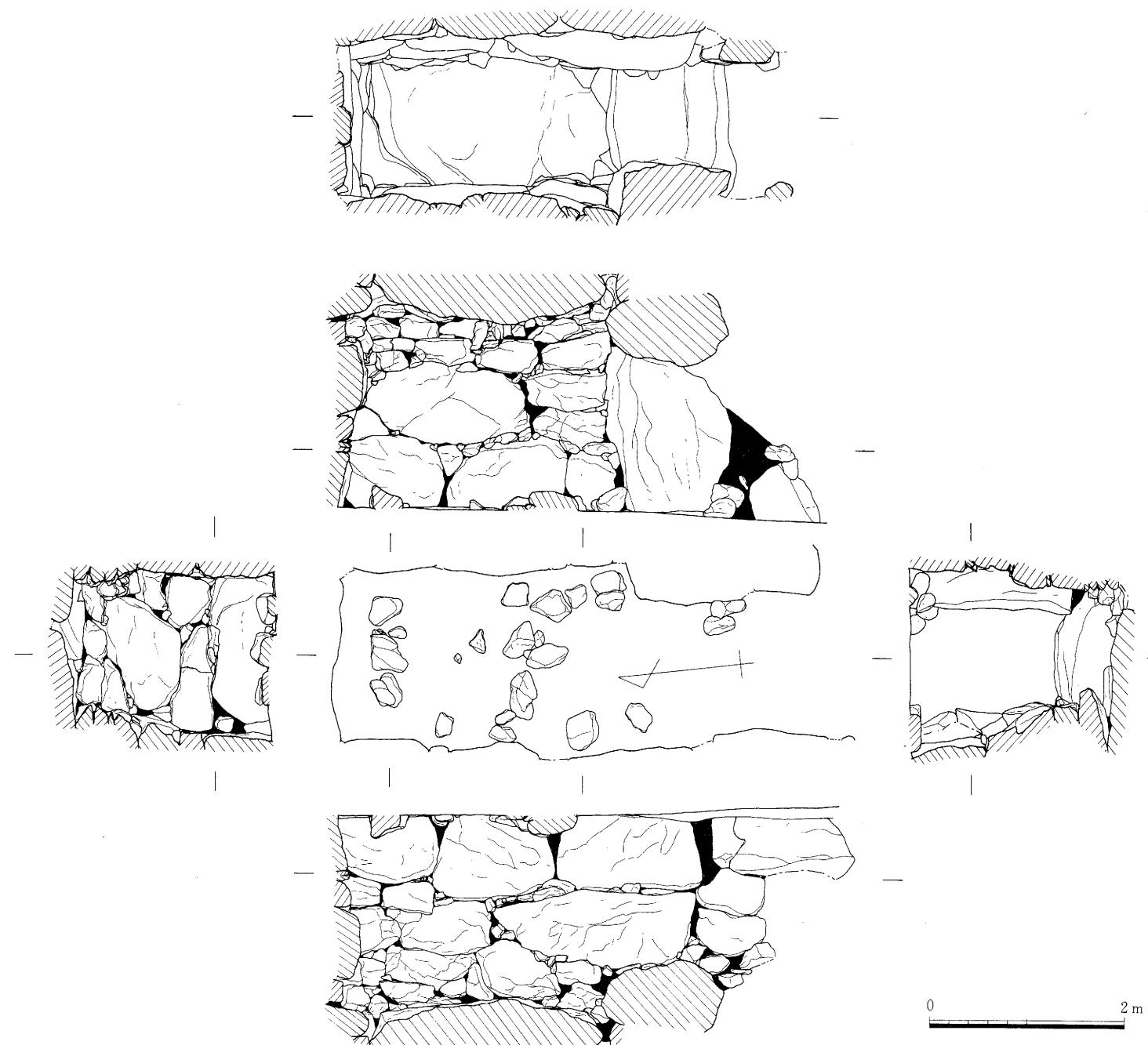


図-9 平尾山第5支群7号墳石室実測図（レベル高177.5m）

第4支群1・2号墳

第4支群1・2号墳については、埋没しているのか破壊されたかを確認することを目的とした。そこで、重機によって約50m²の範囲を現地表面から3m近く掘り下げたが、盛土が厚く、旧表土に達することができなかった。当事者も古墳が存在したことは知っており、埋め立てたと言っていることから、原状のまま地下に埋没しているものと判断し、それ以上の調査は行なわなかった。

第5支群7号墳

第5支群7～10号墳は埋没保存の予定であるため、その周辺の草刈りを行ない、地形測量図を作製した。その結果、第5支群7号墳の横穴式石室については発掘調査を行ない、墳丘東側に第1トレンチを設定、第5支群8号墳は石室がかなり崩壊していることとほぼ現状で保存できるため調査は行なわないことにし、確認できない第5支群9・10号墳と8号墳の墳丘確認のため第2トレンチを設定することにした。

第5支群7号墳は南々西に開口する横穴式石室の羨門部がかなり土砂に埋まっている状態であった。墳丘は西側が他辺りによって著しく損なわれていたが、東側は比較的残存しているものと思われた。立地は南東斜面のかなり下方に当たる。

墳丘東側に1m×6mの第1トレンチを設定し、墳丘の盛土状況を確認するため、地山まで掘り下げた。その結果、60cm前後の厚さの表土・褐色土の下で墳丘を確認できた。墳丘は厚さ10～20cm前後の小単位で積みあげられており、砂質土と粘質土の使い分けによる墳丘の強度維持もはかられているようである。また、周溝が検出されると考えていたが、斜面下方に当たるため周溝は確認できなかった。しかし、墳丘盛土の途切れる位置から下方において、地山の削平が認められた。おそらく、この位置が墳丘裾にあたると思われる。この位置と石室の位置から復元すると、第5支群7号墳は直径10m前後、高さ5m前後の円墳であると思われる。

現地形から考えると、墳丘の北側と西側には周溝が存在すると思われる。また、周辺の横穴式石室墳において、このように細かい単位で墳丘が盛られている例は少なく、斜面下方にのみ細かい単位で盛土を施し、墳丘の保護を図っていることも考えられる。

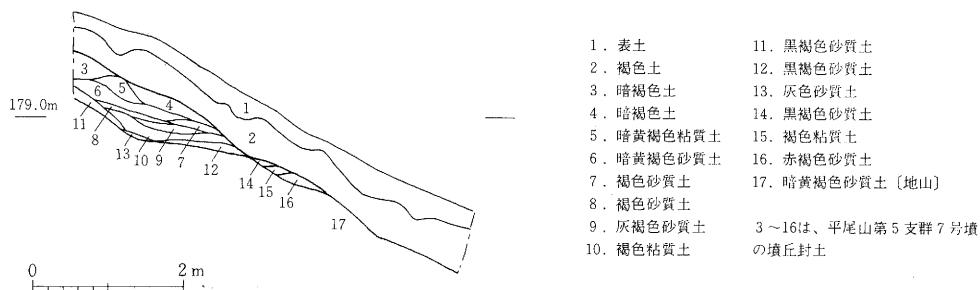


図-10 第1トレンチ北壁土層図

横穴式石室は、S—5°—Wに開口する左片袖式の石室である。石室は全長498cm、玄室長306cm、玄室幅174cm、玄室高は奥壁部分では226cm、最も低い玄室中央では188cmである。羨道長は192cm、羨道幅150cm、羨道高150cmである。

床面は奥壁から羨道へ緩やかに傾斜しており、奥壁床面と羨門床面の比高差は約16cmである。

壁面は自然石、および割石の乱石積みで構築されている。奥壁と玄室下半には自然石の巨石を使用し、その隙間や玄室上半には割石を使用する。羨道の石は内面を平滑に加工しており、特に袖石はかなり加工されている。天井石は3石からなる。

石材は花崗岩が最も多く、安山岩等も使用されている。概して積み方は雑であり、袖や奥壁左隅上半は非常に不明瞭である。

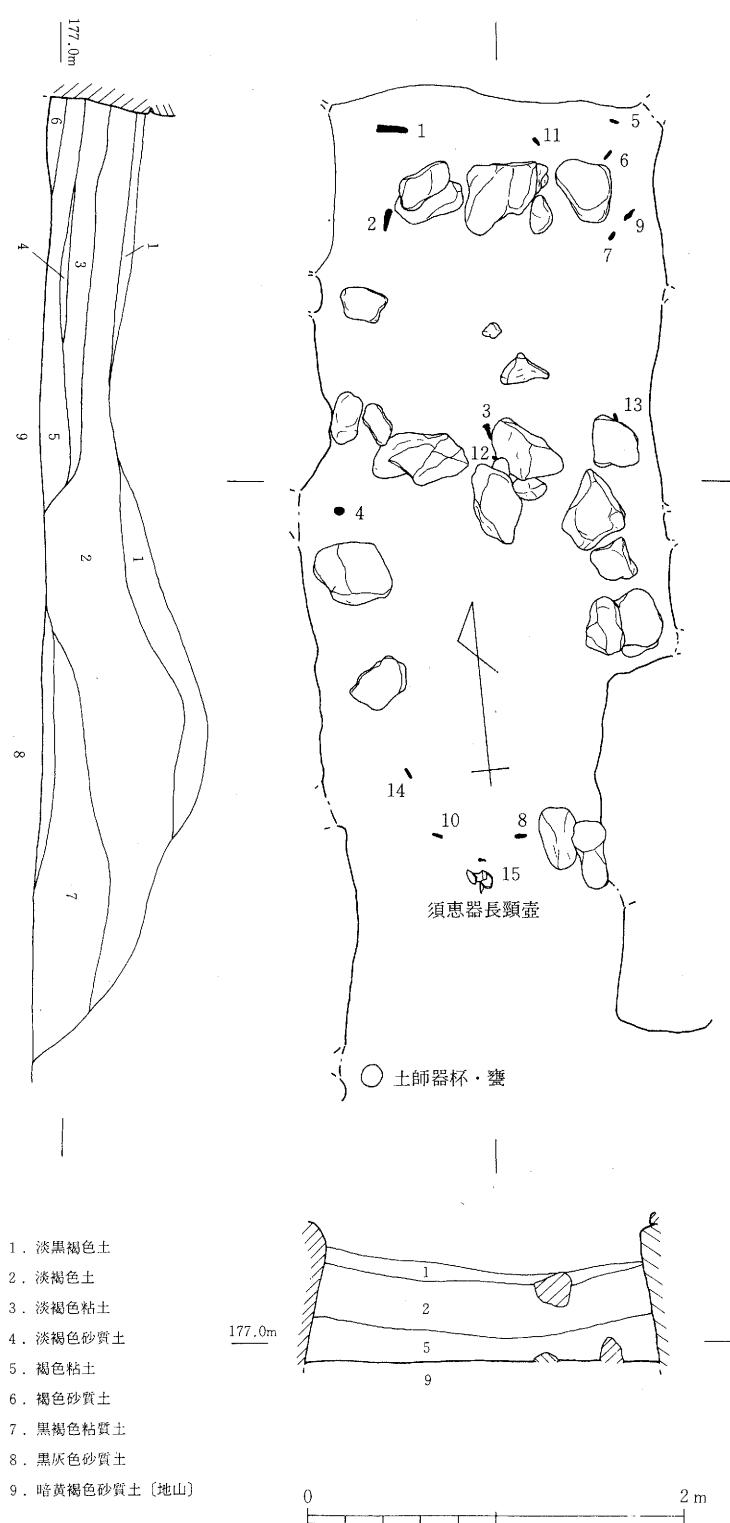


図-11 平尾山第5支群7号墳石室内遺物出土状況・土層

玄室床面には棺台と思われる自然石が多数存在する。奥壁近くと玄室中央でそれらの石は横に並ぶが、石の上面のレベルが一定せず、扁平な石が少ないとことから、棺台石としての使用に疑問も残る。羨道中央左側壁に接して存在する2個の自然石は、閉塞石の一部と思える。

出土遺物は少なく、土器3点のみである。須恵器の台付長頸壺(1)が数点の破片となり、玄室中央の右側壁付近から羨道部中央にかけて出土しているが、完形には復元できない。土師器の杯(2)と甕(3)は羨道部の右側壁近くで出土し、原位置を保っている。しかし、この杯と甕は羨道部に堆積する黒褐色粘質土中から出土している。杯・甕は正置された杯の上に甕を倒置して被せたものである。黒褐色粘質土上面では杯・甕を埋置した際の掘り方がみられなかったため、杯・甕を置いた後に黒褐色粘質土で覆ったものと考える。墓前祭祀に伴う遺物と考えられるが、埋置された時期が閉塞時であるのか、あるいは追葬等に伴うものであるのかは明らかにできなかった。

須恵器長頸壺(1)は頸部を欠失する。口縁はラッパ状に開き、肩部の張りは弱い。沈線や刺突文等の装飾はみられない。台部は外方へふんばる低いものであり、その中程で段をなし、段の下に沈線がめぐる。段の上方には三方に長方形の透孔がみられる。7世紀初頭前後であろう。

土師器杯(2)は小形で、内面に放射暗文を施す。外面底部はナデ調整。土師器甕(3)は体部外面指頭調整、底部はハケメ調整。口縁部はヨコナデを施し、端部で強く外反する。両者の時期は7世紀前葉前後であろう。

土器以外には木棺に伴う鉄釘が15本出土しているが、残存状態は悪く、原位置を留めているとは考えられない。鉄釘の本数や出土状況からは1~2棺が想定される。

鉄釘は15点中、10点が頭部を残している。1~4は大形で、方形平面の頭部を有する。頭部の大きさは1辺2.5~4cm、長さは15cm前後であろう。おそらく、木棺の小口部に使用されていたと考えられ、原位置に近いかもしれない。ほぼ原位置を留めていると考えるならば、1.6~2mの長さの木棺を復元できる。5~8は撥形に開く頭部を有する。頭部の幅は1cm前後、厚さは6cm以上である。9~10は頭部を一方へ折り曲げた形態である。頭部は1辺1~1.5cmの方形平面となる。長さは5cm以上。木目を残すものは小片の13のみである。各形態の鉄釘は使用部位の差によるものか、複数の木棺に伴うものと考えられる。

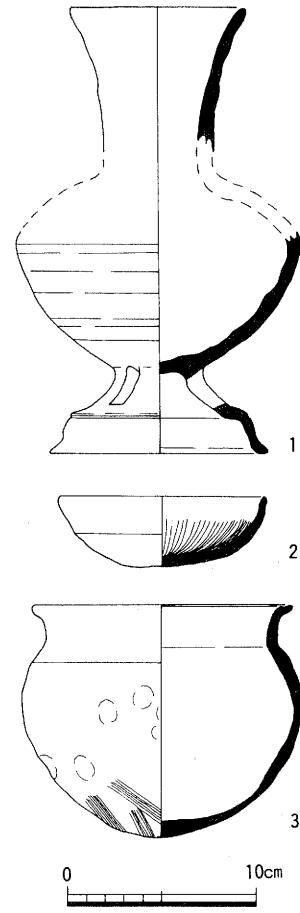


図-12 平尾山第5支群7号
墳石室内出土土器

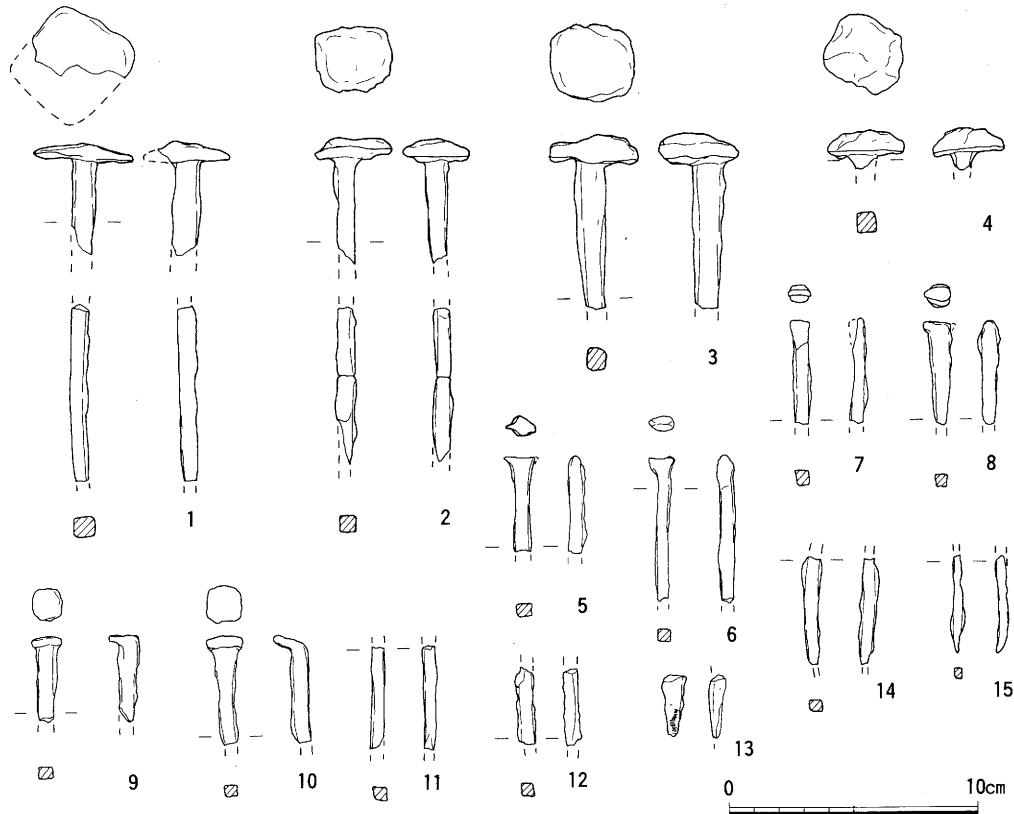


図-13 平尾山第5支群7号墳石室内出土鉄釘

石室の形態や構築技法から考えると、第5支群7号墳の年代は6世紀末葉～7世紀前葉と考えられる。一方、石室内出土の須恵器長頸壺もほぼこの年代に一致する。また、追葬は行われなかつたか、行われたとしても1回のみと思える。土師器杯、甕が古墳構築時に伴う遺物であるかどうかが問題として残されるが、いずれにしても第5支群7号墳の構築は7世紀初頭を前後する時期と考えることができるであろう。

第5支群8号墳

現状では30～160cmの石が散乱した状態であり、横穴式石室の一部と考えられる。開口方向はS-70°-E前後と考えられ、南側、すなわち右壁と考えられる部分は比較的残っているようである。また天井石と思える巨石が3個認められ、その状況から、左壁が内側へ倒壊しているものと考えられる。長さは280以上、幅は80cm前後と推定されるが、玄室部分になるのか、羨道部分になるのかは確認できない。石室形態も確認できないが、石材が小さく、規模が小さいことから、無袖式になると思える。

墳丘を確認するために設定した第2トレーニチでは、斜面下方に当たるためか、墳丘、周溝等は確認できなかった。

第5支群9・10号墳

草刈りを実施したが、9・10号墳を確認できなかったため、第2トレンチによってその存在で確認しようとした。大阪府による分布調査では9号墳は天井石が石室内に落石しているということであり、10号墳は天井石3枚が露出しているということである。ところが、古墳の存在を示すものは全く検出できなかった。旧地形図と現況を比較すると、斜面下方がかなり削平されているようであり、その際にこの2基の古墳は破壊されてしまったようである。

第15支群5号墳

第15支群5・7・8号墳は調査対象地南西に位置する。5号墳は北西へ張り出す小尾根の先端に位置し、墳丘が非常に良好な状態で残っている。予定では墳丘の裾付近まで埋め立てがなされるため、墳丘の規模・築成状況を確認するべく墳丘北東部に第3トレンチを、北部に第4トレンチを設定した。

第3トレンチは1m×11mの規模である。墳丘は現地表下40~80cmで確認され、黄褐色砂質土の单一土である。トレンチ北端近くでは周溝が検出された。周溝底は地山に至り、墳丘側には暗褐色砂質土を、外側には自然石の巨石を置き、その上に暗褐色砂質土と褐色砂質土を重ねることによって周溝を整形している。周溝埋土は黒褐色粘質土である。

第4トレンチは1m×4.2mの規模である。第3トレンチで検出された周溝の延長を確認するために設定したものであるが、周溝の延長は確認できなかった。しかし、トレンチ中央よりやや北に寄ったところで、地山を整形している部分を確認した。

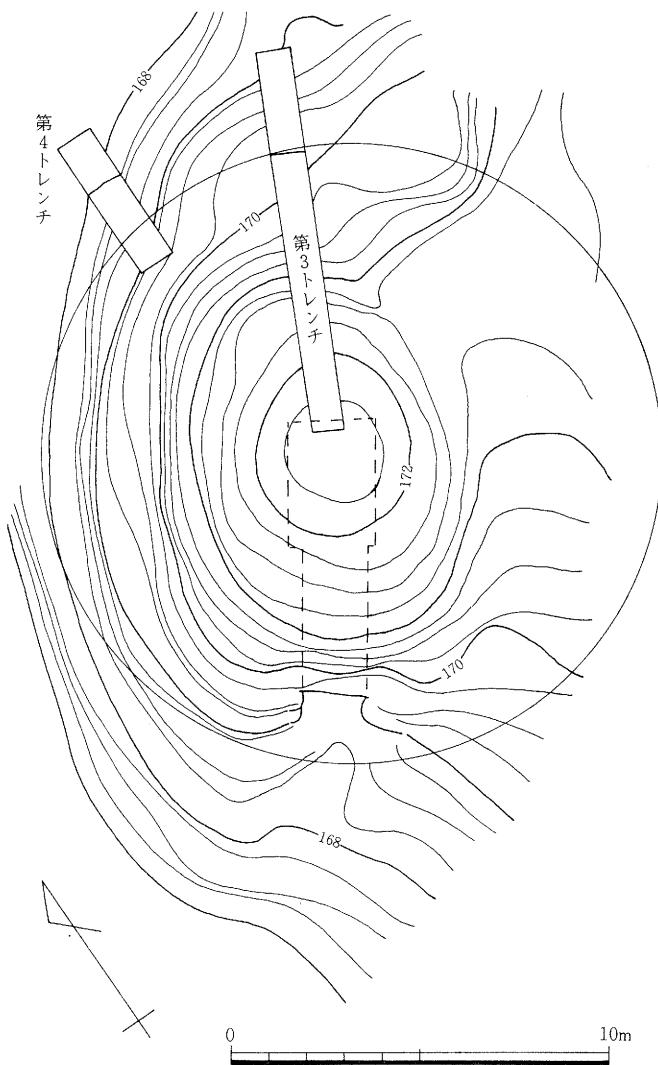


図-14 平尾山第15支群5号墳墳丘測量図

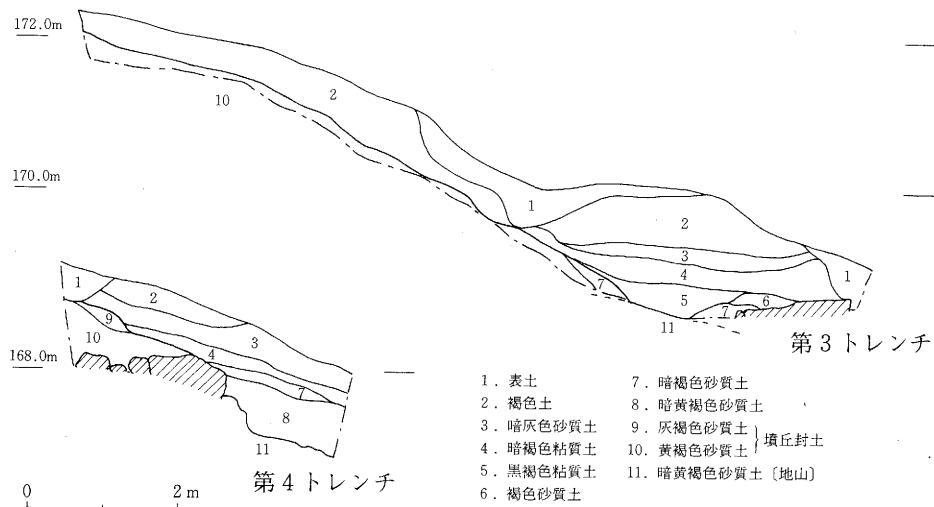


図-15 第3・4トレンチ土層図

この部分で地山は70°前後に削平され、それ以北は15°～20°の緩傾斜面となる。おそらく、この部分が墳丘裾と考えられる。

また注目すべきこととして、地山整形部分から墳丘側に20～100cmの大きさの自然石が数個積み重ねられている事実がある。これらの石は地山上に置かれていると考えられ、この石群の上に封土である黄褐色砂質土を盛り、一部に灰褐色砂質土を盛っている。この石群は墳丘裾の崩壊を防ぐために置かれたものと考えられる。おそらく、標高の下がっている墳丘北側から西側にかけて、この技法によって墳丘を築いているものと思える。第3トレンチ確認された周溝が消滅しているのも、標高が下がっているためと思える。このように墳丘裾を堅固にしているため、現在まで墳丘が良好な状態で残っていると言えよう。

石室の位置や第3トレンチの周溝の位置から復元すると、5号墳は直径16～17mの円墳と推定される。第4トレンチで検出された地山整形の位置は、この推定墳丘よりかなり外方に位置することになるが、これも標高が低くなっているためと解釈できよう。

横穴式石室はS-33°-Wの方向に開口する。両袖式の石室は床面が若干の土砂で埋まっているが、現況で保存できるために発掘調査は行わず、石室の実測のみを実施した。石室の全長は848cm、玄室長340cm、玄室幅は奥壁近く212cm、玄門近くで225cmを測り、羨道へ向かってやや広がっている。玄室の高さは奥壁近くで247cm、玄門近くで208cmとなり、奥壁部分の天井がかなり高くなっている。羨道長は508cm、玄門での羨道幅は156cm、羨道の高さは121cmである。高さはいずれも現在値であり、実際にはもう少し高くなる。

石室は自然石の乱積みであるが、工具で表面を加工した石もみられる。奥壁、および玄室北半の石は自然石が多いが、玄室南半から羨道にかけては加工を施し、面を平らにした石が多い。天井石は玄室2石、羨道3石から成る。壁面には緩やかな持ち送りが認められる。

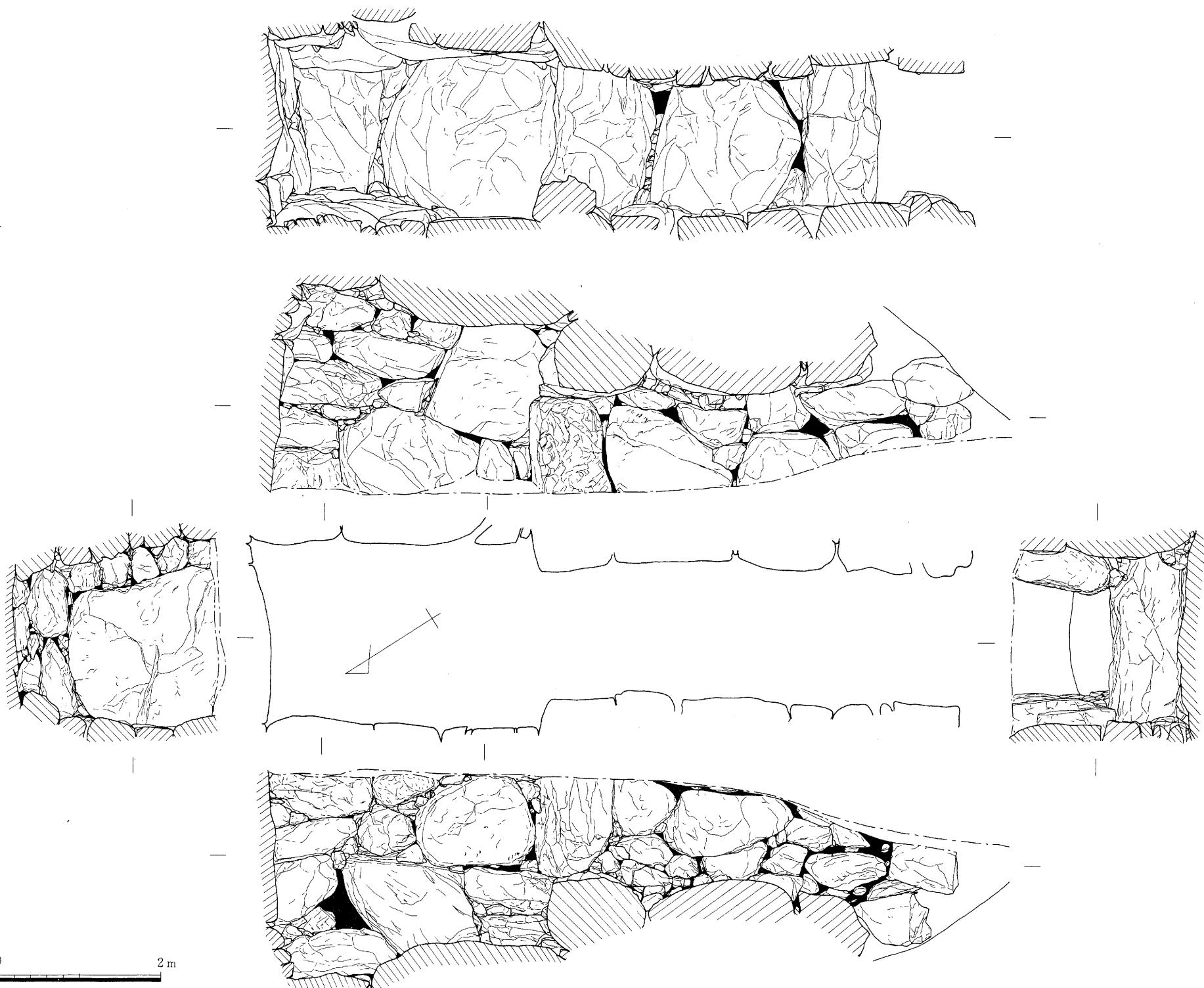


図-16 平尾山第15支群 5号墳石室実測図（レベル高168.5m）

両袖石は袖を明瞭にするために、工具でかなり加工されている。袖幅は左袖が約45cm、右袖が約40cmとなる。また、右袖は左袖よりも約10cm羨道側へ寄っている。

この石室の特徴として、奥壁の石材使用方法が注目される。奥壁下部には巨石を使用しており、石室構築以前はこの石材の幅を玄室幅にする予定であった可能性が考えられる。ところが、玄室幅を広くすることが必要になったようであり、50cm前後の大さの石を左側に積み上げることによって、玄室幅を広くしている。当然のことながら、左隅角部は右隅角部に比して不明瞭となっている。

羨道部床面から瓦器椀の破片を1点採集した。内外面に雑なヘラミガキを施し、外面下半には指頭痕が顕著に残る。器高は低く、おそらく低い高台を伴う13世紀後半代のものであろう。横穴式石室でしばしばみられる中世の再利用に伴う遺物であろう。

石室の形態、構築技法から推定される年代は6世紀後葉頃である。第15支群5号墳は石室、墳丘とともにほぼ完存する貴重な古墳である。

第15支群7・8号墳

大阪府の分布調査によると、7号墳は小石を使用した無袖式の石室と推定されており、開口方向はS-20°-W、玄室長530cm、玄室幅120cm、玄室幅100cm以上とされている。8号墳は直径8.2m、高さ2.5mの円墳であり、天井石が2枚露出しているということである。しかし、7号墳の位置にはポンプ施設が設置されており、8号墳の位置は水田となっている。ともに古墳は確認できず、過去に破壊されてしまったようである。

小結

今回の調査では、第15支群5号墳を現状保存、第5支群7・8号墳を埋没保存し、慎重に埋め立て工事を実施するという誓約のもとに、工事を認めた。

平尾山古墳群では、昨今かなり開発が進められており、その対応策に苦慮している。現状のまま後世に残していくのがベストであるのはもちろんあるが、古墳の破壊を伴わない工事を社会教育課の立場から止めることは困難である。また、山間部にあるため、無届で工事を実施されると、手遅れになることがしばしばある。今回の例では、埋め立て工事以前に既に4基の古墳が破壊されていたようである。機会をみてはパトロールをするのだが、それも限界がある。今後、関係各課との協力によって、平尾山古墳群内の開発計画には慎重に対応していきたいと考えている。

参考文献

大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975

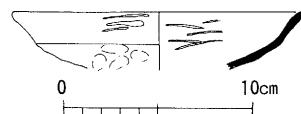


図-17 平尾山第15支群5号
墳石室内出土遺物

第3章 安 堂 遺 跡

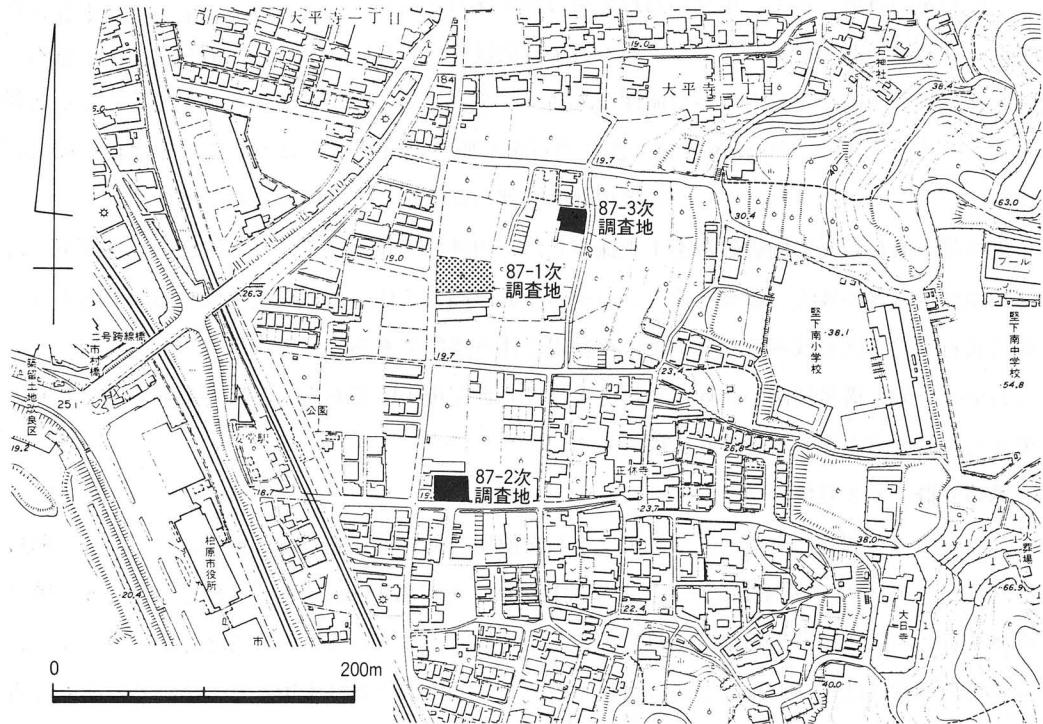
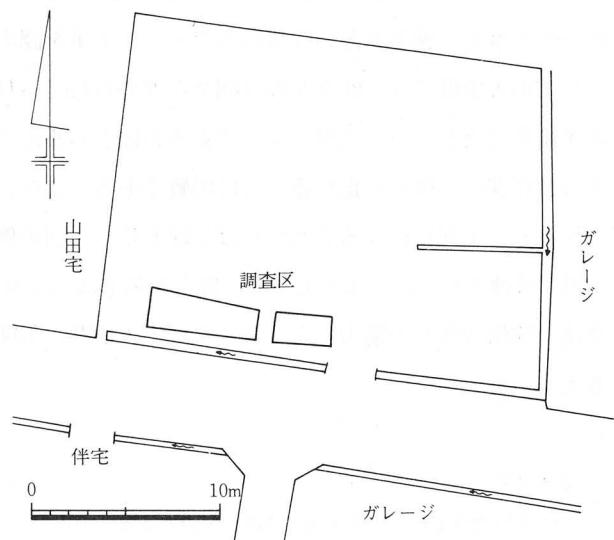


図-18 調査位置図（方位は真北）

87-2次調査

- ・調査地所在地 柏原市安堂町
664-1
- ・調査期間 1987年6月25日
～6月27日
- ・調査面積 20m² / 406m²
- ・調査担当者 石田成年



1. 調査概要

調査地は飛鳥時代に創建された河内六寺のうち家原寺の西50mに位置する。また、孝謙天皇が難波に行幸された際に立ち寄った「智識寺南行官」推定地

図-19 調査区位置図

が東北150mにある。今回の調査はスーパーマーケット建設工事に伴う事前調査である。現状は葡萄畠であり、隣接の道路より約1m低い。

調査は対象地の南辺に東西10m、南北2mの調査区を設定し、表土、耕土を重機により、以下を人力により掘削した。その結果、現地表下120cmで奈良時代を中心とする遺物を含む溝状遺構を検出した。しかし、店舗建設にあたり道路面まで盛土施工をすることであった為、建物基礎による遺構への影響は少ないものと判断し、調査区の拡張は行なわなかった。また後日、基礎工事に立会したが、遺構、遺物とも認められなかった。

2. 遺構

調査区の層序は上から、橙灰色砂質土、灰褐色砂質土、灰色砂土、黒灰色砂質粘質土、黒灰色粗砂土、茶橙灰色粘質土（地山）の順である。

遺構として、茶橙灰色粘質土（地山）を穿つ溝状遺構を検出した。深さは50cmで、黒灰色砂質土、黒灰色粗砂土を埋土とする。幅については調査区の拡張を行なわなかった為、不明である。底面の傾斜の状況から、西流する溝とみられる。

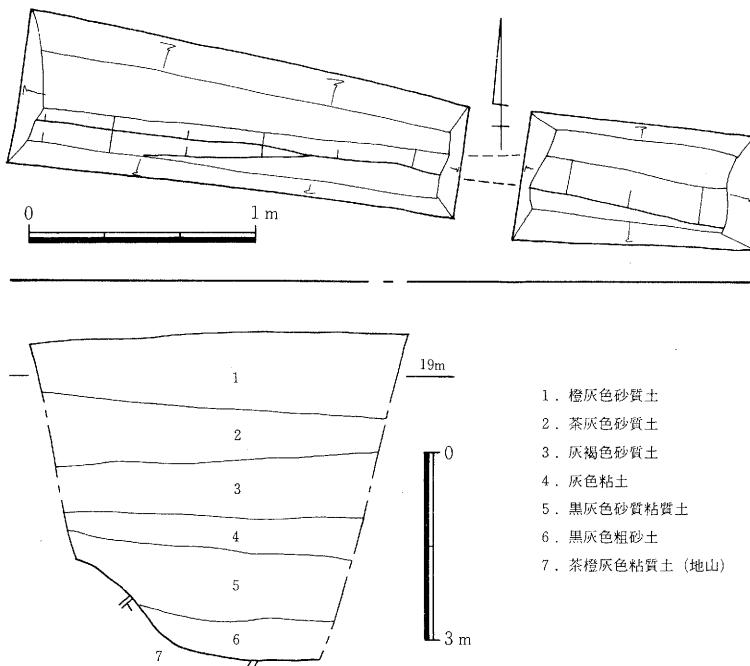


図-20 平面図、西壁土層図

3. 遺物

遺物として、須恵器、土師器、瓦、石製品がある。石製品を除いて完形になるものはない。溝状遺構埋土から出土のものを図示した。

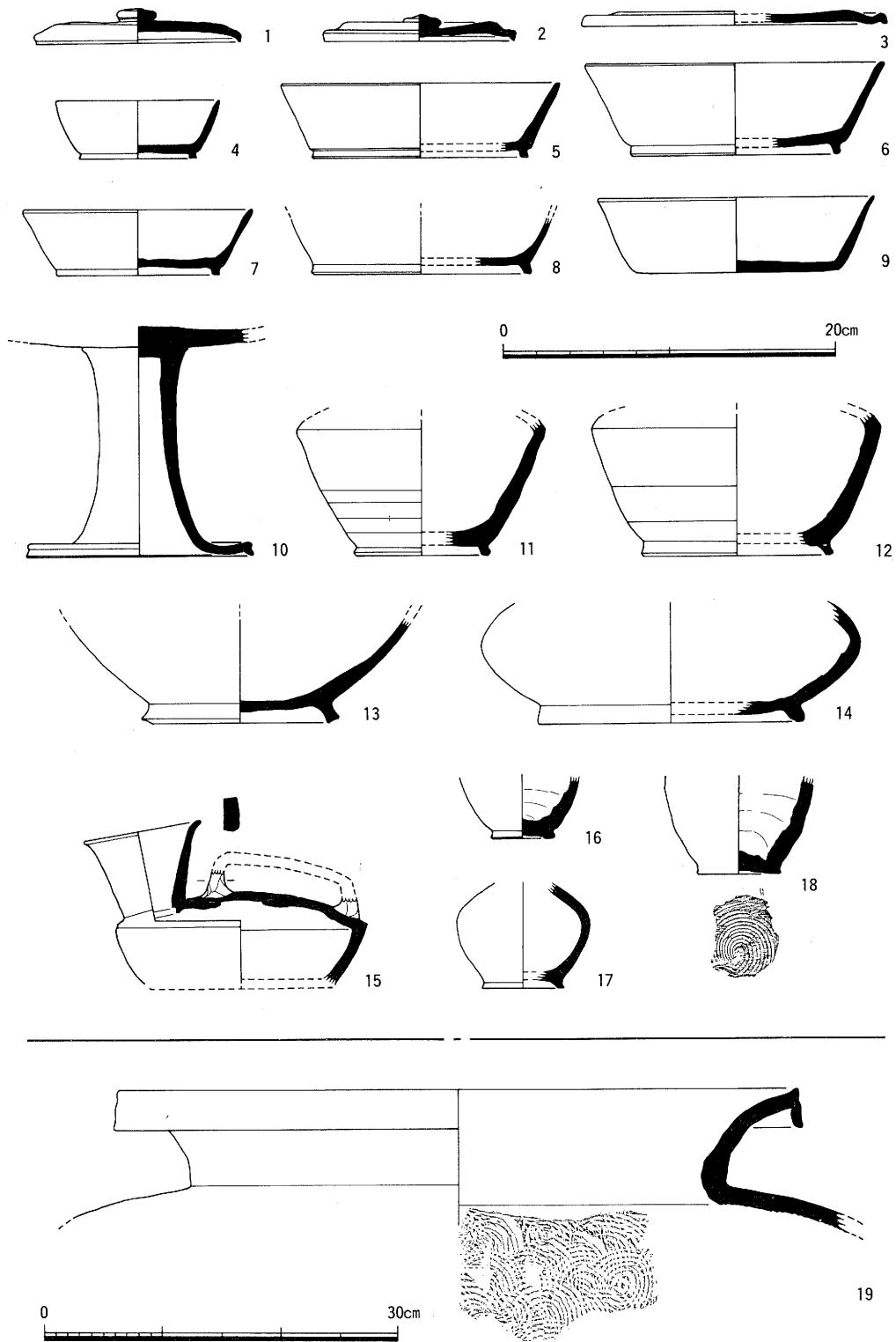


図-21 出土遺物（1）

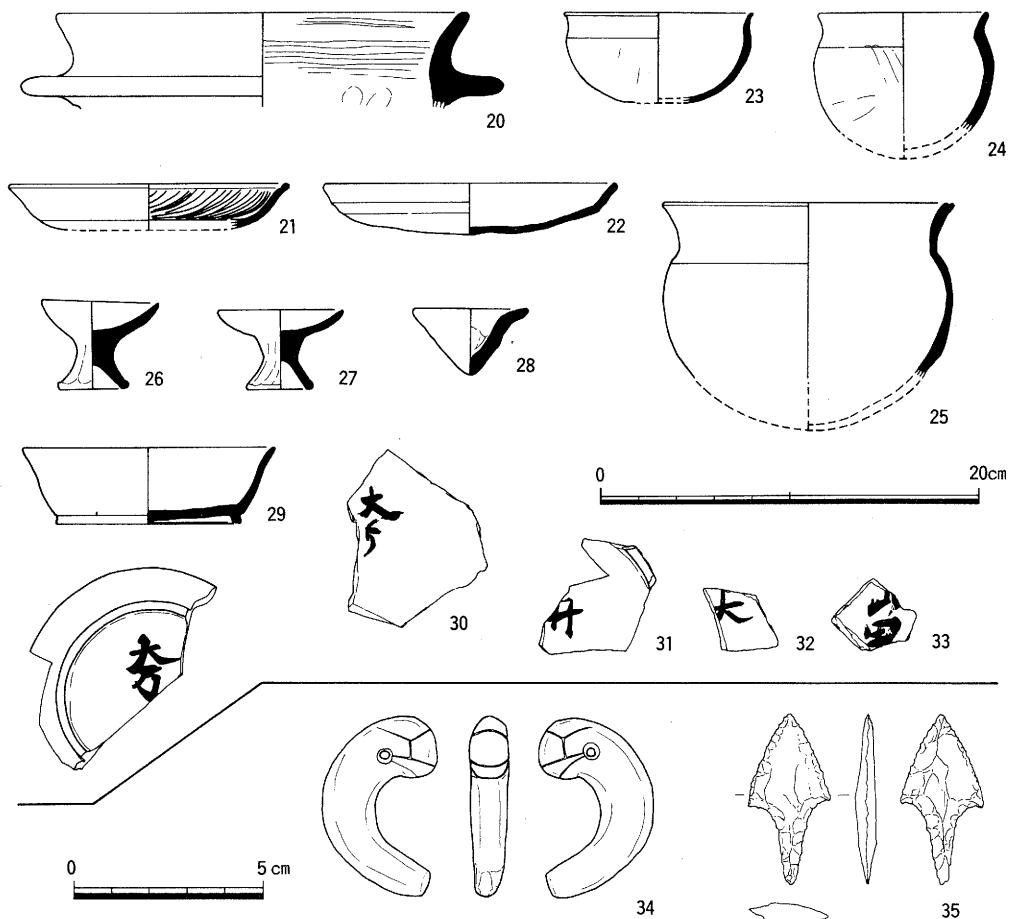


図-22 出土遺物（2）

28はミニチュア土器。口径6.2cm、器高3.5cmを測る。淡褐白色を呈し、1mm以下の砂粒を多く含む。成形は長方形の粘土帯を時計回りに巻き上げ、継目をナデる。内面に継目痕が残る。口縁は大きく外反する。底部はやや丸くする。29～33は墨書土器。29・31は高台の付く須恵器の杯。他は土師器。「大乃」「井」「大」「山田」と読むのであろうか。墨書土器については図示したものの他に破片として十数点があるが、文字、記号の判読が困難である。34は勾玉。滑石製とみられるが劣化が著しい。色調は白緑色。胴部は大きく屈曲し、尾部先端は尖らず、切り落とされたような形状をなす。頭部には4条の刻線が入る。35は有茎の石鏸。サヌカイト製。重量は3.25g。

87-3次調査

- ・調査地所在地 柏原市安堂町919-2
- ・調査期間 1987年11月11日～11月14日
- ・調査面積 9m² / 239m²
- ・調査担当者 石田成年

調査概要

調査地は飛鳥時代に創建された河内六寺のうち智識寺、家原寺の中間地点にあたる。また、孝謙天皇が難波に行幸された際に立ち寄った、「智識寺南行宮」推定地の中心地でもある。

調査は対象地の東南に3m四方の調査を設定して実施した。掘削は人力により現地表下130cmまで。

層序は上層から表土、耕土、橙灰色粘質土、青灰色土、灰色砂土、黒青灰色粘土の順である。遺構として黒青灰色粘土層を穿つ柱穴掘形を2個検出した。柱穴1は60×45cmの隅丸方形平面を呈する。柱の推定直径は約15cm。柱穴2も90×80cmの隅丸方形平面を呈し、柱の推定直径は約20cm程度とみられる。両者とも深さは20cmと浅く、対象地においては、遺構面が既に大きく削平を受けているものとみられる。

遺物については各層からの出土があったが、灰色砂土層から出土したものを図示した。

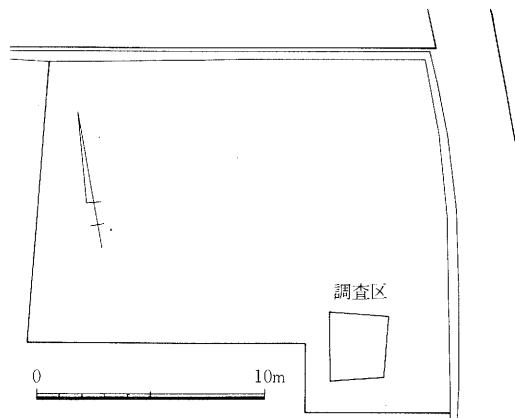


図-23 調査区位置図

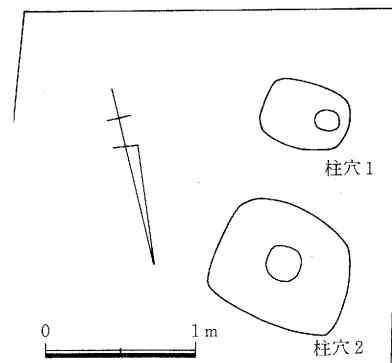
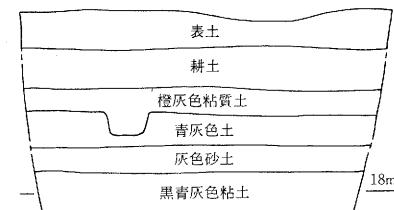


図-24 平面図、南壁土層図

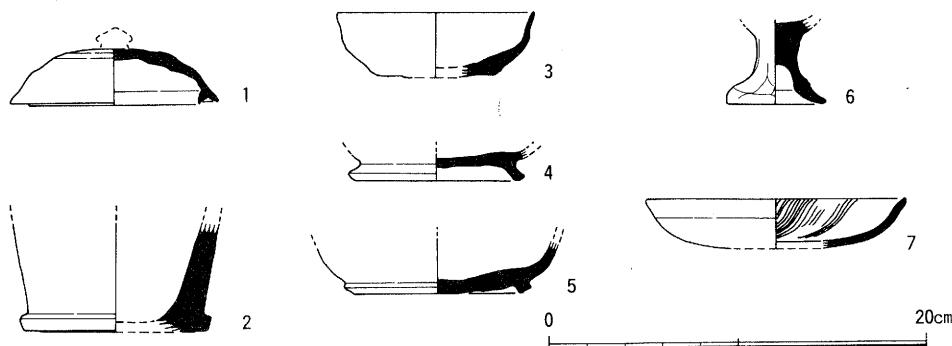


図-25 出土遺物

第4章 原山廃寺

87-1次調査

- ・調査地所在地 柏原市旭ヶ丘3丁目9-14
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1987年8月3日～7日
- ・調査面積 $22.5\text{m}^2 / 522.53\text{m}^2$

調査地は原山廃寺の推定寺域内に位置し、主要伽藍の存在が予想される場所にあたる。現状は個人住宅の庭であり、ここに木造住宅の新築工事が計画されたため、緊急発掘調査を実施した。

調査地西半の地表面は東半より約40cm高く、西半を削平し、東半へ盛土する計画であった。そのため、調査地西半に幅1～1.5m、長さ10mの南北トレーンチとその中央部から西へ幅1.5m、長さ5mのトレーンチを設定し、調査を実施した。

土層は耕作土下に、屋瓦を多量に含む層が認められるが、現代の屋瓦等も含んでおり、最近の人为的な盛土と考えられる。地表下30～90cmで暗赤褐色粘質土の地山に至る。地山は北から南へ、西から東へと緩やかに傾斜し、トレーンチ中央部で約50cmの段差が認められる。地山面には浅い凹凸が認められるが、遺構は全く存在しない。

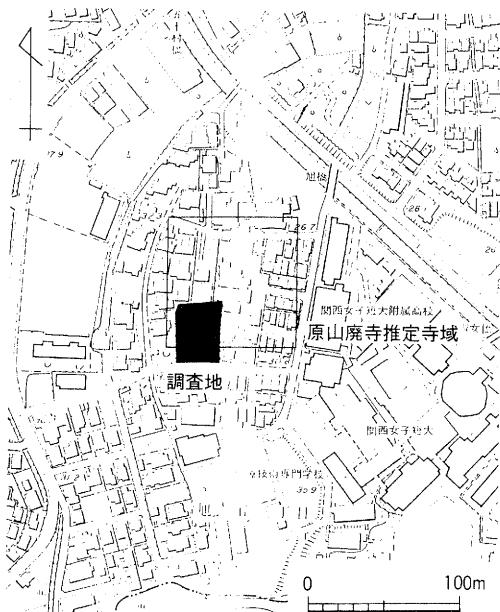


図-26 調査地位置図

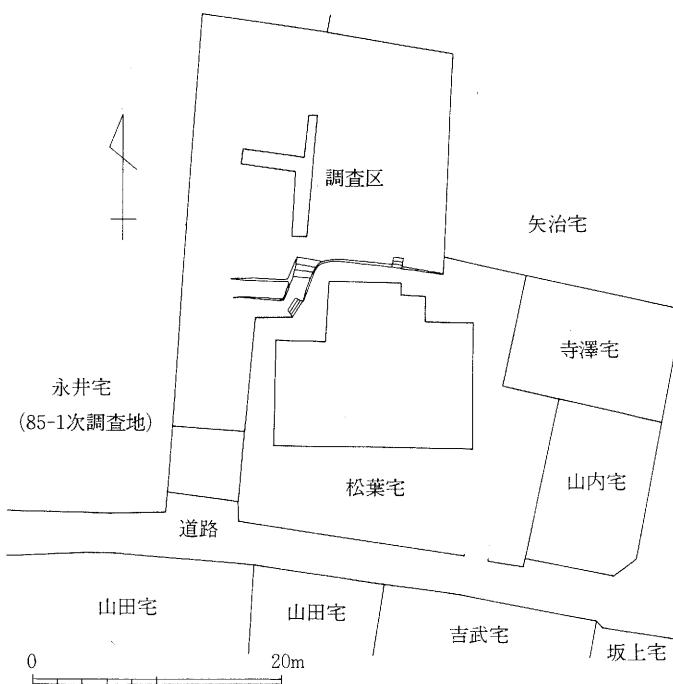


図-27 調査区位置図

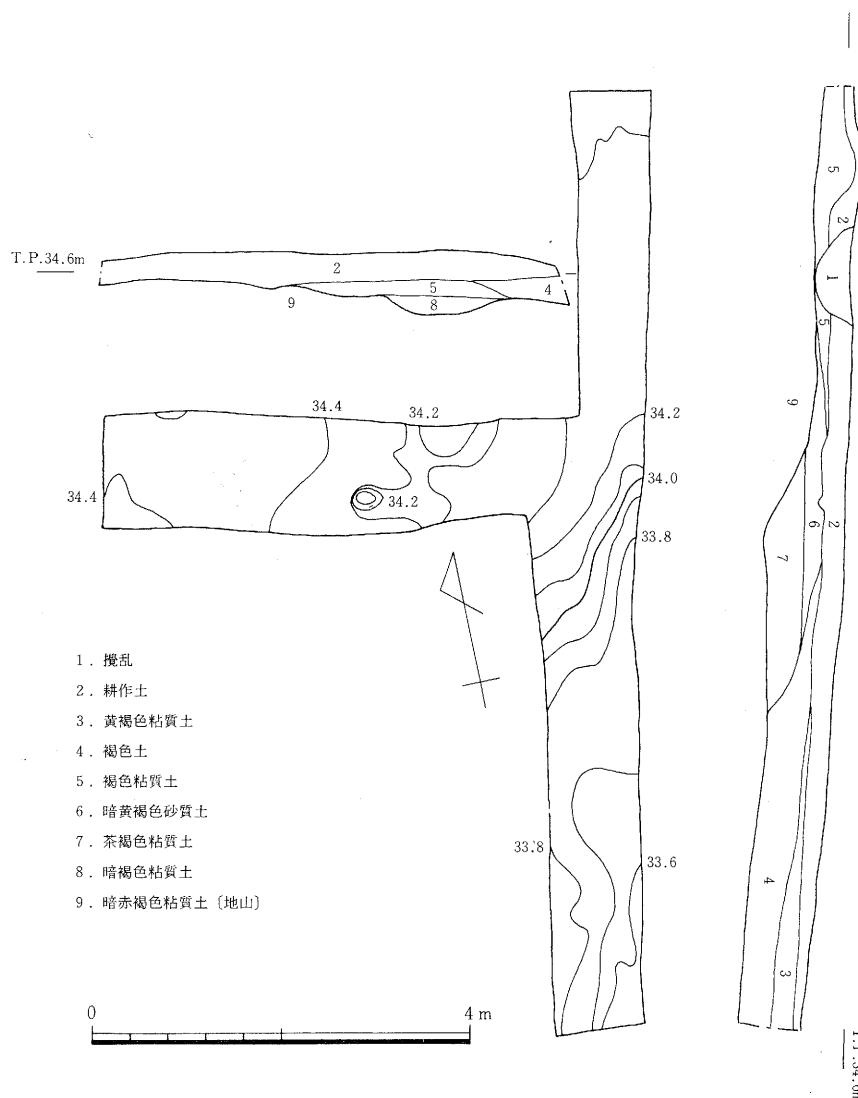


図-28 地山等高線図・土層図

トレンチ中央の段差が基壇縁辺を示すとも考えられるが、基壇に伴う遺構、遺物が全く認められず、地山直上の土層が現代の層であることから、その可能性であることから、その可能性は極めて低い。調査地の西側に隣接する永井宅における85-1次調査でも、寺院に伴う遺構は確認できていない。今回の調査地、およびその西側は周辺で最も現地表面の高い場所であるが、遺構は全く確認できなかった。調査地周辺は宅地が密集しており、主要伽藍は既に削平されているか、もしくは更に北側に主要伽藍が存在するのいずれかであろう。今回の調査地における工事は地山まで達しないため、調査範囲を拡張することは避けた。工事に伴う立会調査においても、遺構は確認されていない。

遺物は多量の屋瓦片以外に、少量の土師器・須恵器が出土しているが、図化可能なものは存在せず、時期の判明するものもほとんどみられない。その中で、上面に切り込みを有する甌の把手が1点出土している。把手の上面には、長さ3cm、幅0.2cm、深さ0.5cmの切り込みが認められる。鋭い刀子状の工具で切り込まれているようである。把手は短く、やや反り上がり、断面は円形に近い。把手の下面には粗いハケメが施され、他はナデ調整である。体部器壁の厚さは約0.5cmであり、内面はタテ方向の細かいケズリが施される。

屋瓦は多数出土しているが、いずれも小片であり、良好な資料は少ない。軒瓦の小片が1点出土しているのみである。単弁蓮華文軒丸瓦の弁2枚分の小片である。磨滅が激しいため、原形の確認が困難であるが、原山廃寺で多数出土している弁間に珠文を配する単弁蓮華文、もしくはそれに近似する文様の軒丸瓦に推定される。平瓦は、叩き目の多様なものが出土している。2~5は、凸面整形の後、丁寧なナデを施し、更にスタンプ状の叩きを施すものである。2・3は有軸の綾杉文、4・5は有軸綾杉文の軸両側に2本ずつの軸を伴い、斜格子状をなす。いずれも叩き原体の幅は7cm前後である。6・7は縄叩き目を有する。6は2本/cm、7は3本/cmの縄叩き目を平瓦側縁と平行に施す。7はその叩き目的一部分をナデによって磨り消している。片瓦は、いずれも桶巻作りによるものである。

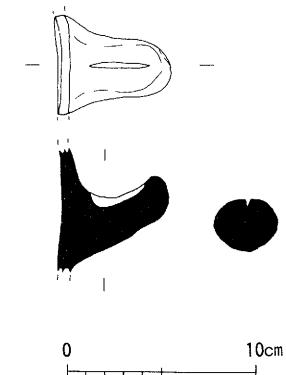


図-29 出土遺物

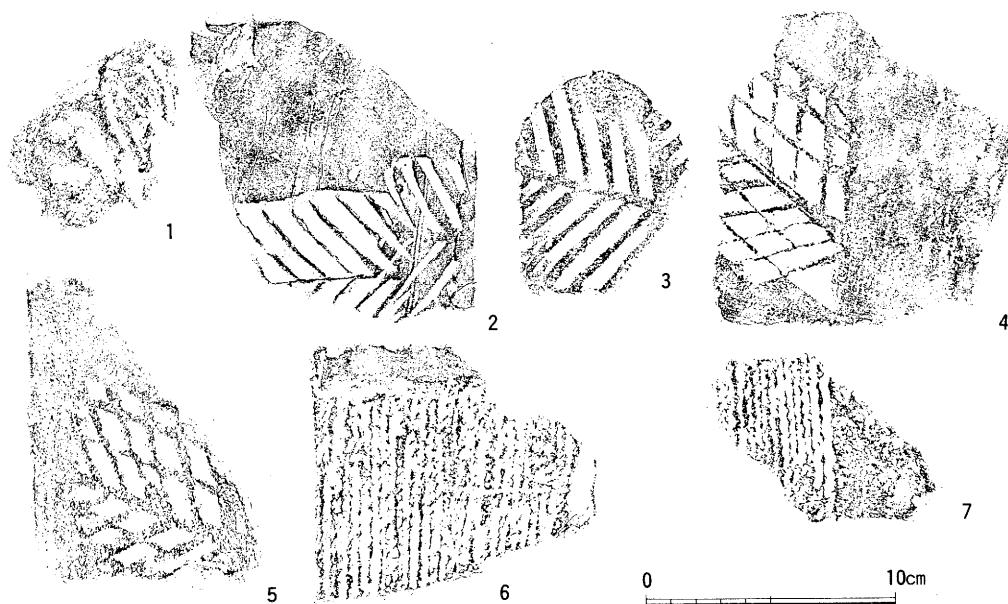


図-30 出土屋瓦拓影

第5章 田 辺 遺 跡

87-5次調査

- ・調査地所在地 柏原市国分本町6丁目3-16
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1987年7月14日～15日
- ・調査面積 6m² / 208.26m²

調査地は西へ下る傾斜変換点に位置し、標高はT.P.38m前後である。調査は建物建築予定地に2m×3mのトレーナーを設定して実施した。遺構は地表下40cm前後の地山面において検出されたが、遺物包含層は認められなかった。地山は礫を含む黄褐色砂質土である。

遺構は掘立柱柱穴6、土坑2が検出された。ピット-1は直径22cmの円形を呈し、深さ約30cmを残す。ピット-2は1辺35cm前後の隅丸方形を呈すると考えられる。ピット-3は65cm×75cmの隅丸方形平面を呈し、柱の直径は約33cmを測る。ピット-4は1辺42cmの隅丸方形平面と考えられるが、ピット-3に切られている。ピット-5は直径40cmの円形を呈し、柱の直径は約18cmである。上面がかなり削平されているようで、深さ約10cmを残すのみである。ピット-6は1辺40cm前後の隅丸方形平面を呈すると考えられ、ピット-3に切られている。いずれも調査区内には対応すると考えられるピットは認められず、規模もかなり異なる。掘方埋土はピット-1・2が褐色粘質土、ピット-3・6が黒褐色砂質土、ピット-4が灰色土、ピット-5は焼土や木炭を含む黒灰色土である。ピット内からは少量の遺物が出土しているが、時期を決定できる遺物は認められない。

土坑-1は調査地北西隅で検出され、方形状を呈する。埋土は灰褐色土、土坑-2を切って掘り込まれている。土坑-2は西側へ緩やかに落ち込んでいる。埋土は肩部から底にかけて、黒灰色の焼土、木炭などがみられ、その上層に褐色土がみられる。ピット-3～6は土坑-2上面に掘り込まれている。土坑-2から出土した遺物は少量であるが、7世紀中葉から末葉の遺物を含んでいる。土坑-1もほぼ同時期と考えられる。ピット-1・2は土坑-2の埋土に酷似しており、土坑-2と同時期と考えられるが、ピット-3～6は7世紀末葉以後の遺構と考えられる。

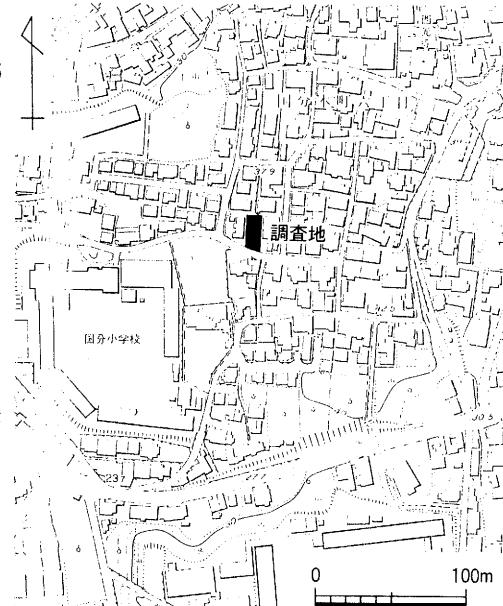


図-31 調査地位置図

遺物は残存状態の良好なものが少なく、土坑－2から出土した土師器鍋(1)と土師質竈(2)のみ図化した。土師器鍋は口径32cmを測る。体部、底部の破片も存在するが、接合不可能であった。口縁は、くの字状に外反し、端部でやや厚くなり、面をなす。口縁部はヨコナデ、体部は内外面共にナデを施す。色調は赤褐色である。

2は土師質竈右脚部の破片。脚は1.8cmの厚さであるが、下端で2.5cmと厚くなり、丸味をもって終わる。体部は約0.6cmの厚さであり、脚下

端は体部下端よりも3.3cm下方に位置する。ナデ仕上げ。ほかに庇、脚等の破片が十数点出土している。いずれも曲げ庇で、茶褐色、雲母、角閃石・石英・長石等を含む同一の胎土である。

これ以外に、土師器、須恵器、サヌカイト片、鉄滓が出土している。鉄滓は土坑－1から1点、表土内から1点出土している。前者は長径8.8cm、短径6.5cm、厚さ65cm、厚さ5.2cm、重量411g。後者は長径5.7cm、短径5.3cm、厚さ4.0cm、重量140gである。いずれも拳状の外形を呈し、小礫が外面に付着する。

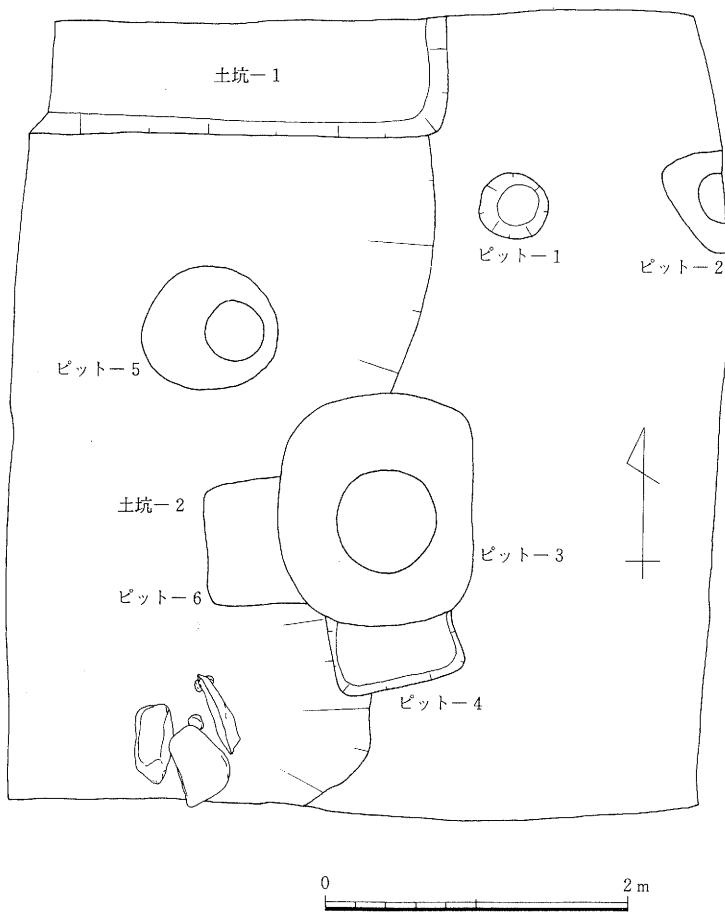


図-32 遺構平面図

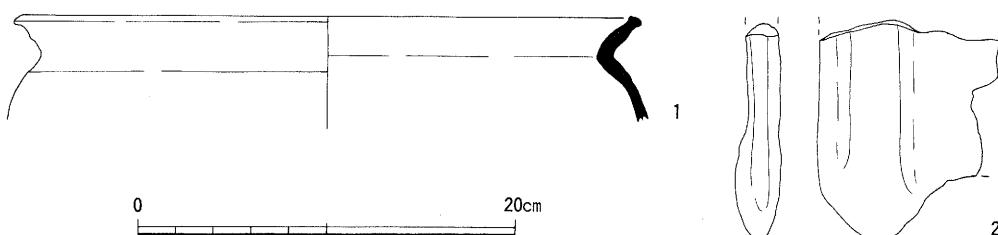


図-33 出土遺物

87-6次調査

- ・調査地所在地 柏原市田辺2丁目2065-1・2066-1
- ・調査期間 1987年9月7日～9月14日
- ・調査面積 42m²／300m²
- ・調査担当者 石田成年

調査概要

調査は国指定史跡田辺廃寺の真南に位置する。廃寺の南大門跡とは道路一つ隔たるだけである。標高は約42.5mである。

調査は対象地の北端に6.5m四方の調査区を設定し旧表土までを重機により、以下を人力により掘削した。層序は上から盛土、旧表土、灰色粘質土、茶色粘質土、橙白色砂質粘質土（地山）、橙白色粘質土（地山）の順である。旧表土以下の層については各々15～20cmの厚さで、ほぼ水平に堆積している。遺構として橙白色砂質粘質土（地山）を穿つ柱穴掘形、溝状遺構、

土塹を検出した。遺構面は南大門礎石上面より約1m低い。

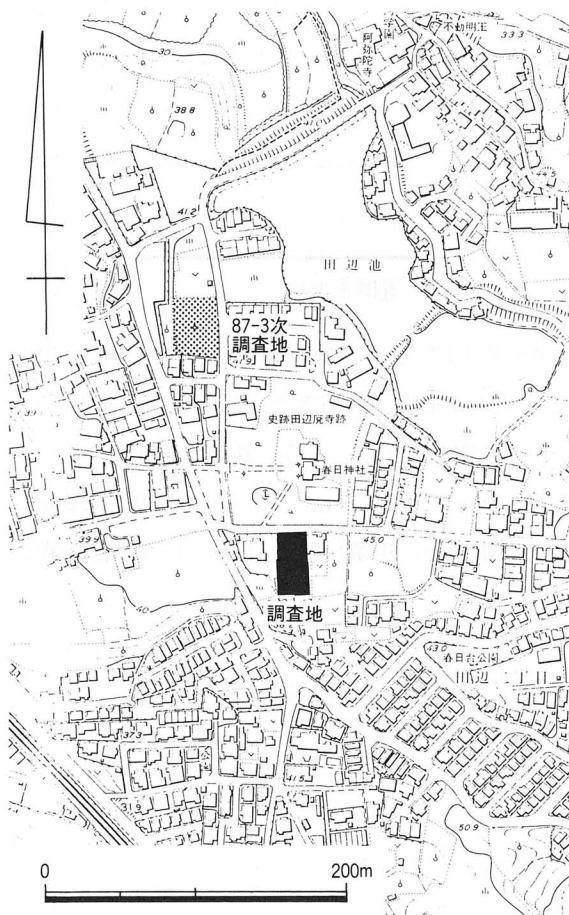


図-34 調査地位置図（方位は真北）

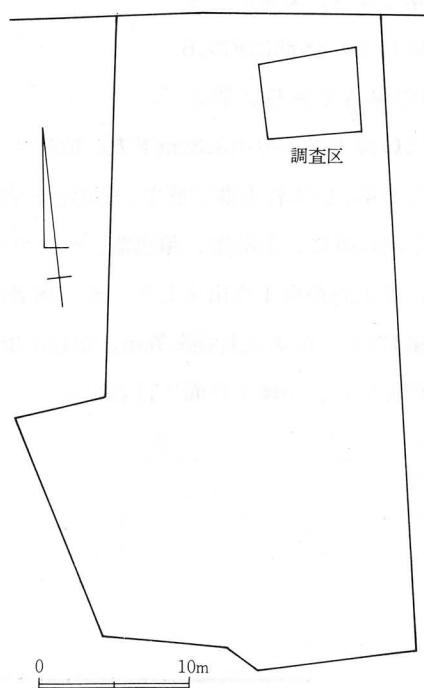


図-35 調査区位置図

柱穴は総てで17基検出した。掘形は一辺30~50cm、深さは15~25cm、柱径は15~20cmを測る。明確に建物と認められる柱穴はないが、柱穴1~5、14で2間×2間の建物を構成するのかもしれない。但、3と14、5と14の間の柱穴については検出に努めたが認められなかった。柱穴1~2~3の柱間寸法は各1.6m、1~4~5は1.6m、1.3mである。

溝状遺構は調査区の北辺と西辺に沿うように検出した。幅は60~140cm、深さは10~20cmを測る。調査区南壁においてその断面に溝状の落ちが認められなかったことから図示した位置で終結するか、あるいは西へ屈曲するようである。前述の2間四方の建物が存在するのであれば、この溝状遺構はその建物の北と西を限る位置にあることになる。

土塙は2基検出した。130~70cmの大きさを持ち、深さは20cmを測る。性格や柱穴群、溝状遺構との時間的前後関係は不明である。

遺物は、旧表土以下の各層、遺構内から須恵器、土師器等が出土している。しかし何れも細片であり、磨滅が著しく、図示できるもの、時期決定できるものは皆無である。

以上のように、遺構の残存深が浅いこと、遺構面上層の遺物の磨滅が著しいことから、対象地においてはかなりの削平を受けているようである。遺構の時期決定が不可能なこともあり、今回検出の各遺構と田辺廃寺との関連についても明確にすることはできなかった。

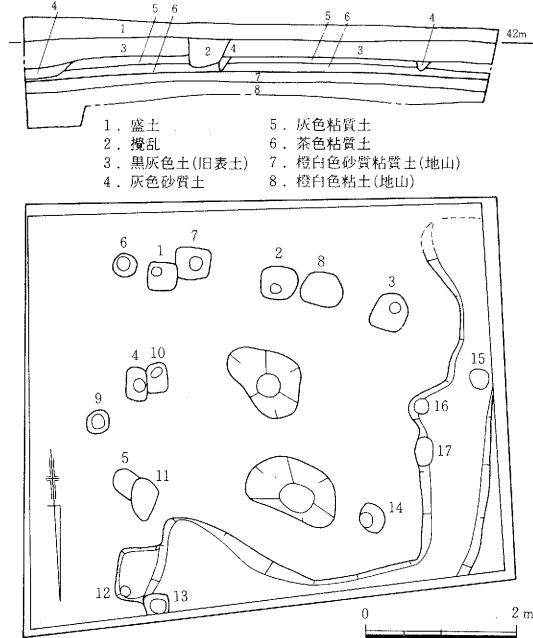


図-36 平面図、南壁土層図

第6章 国分尼寺跡

87-1次調査

- ・調査地所在地 柏原市国分東条町2581-2
- ・調査期間 1987年5月19日～5月20日
- ・調査面積 7m²／207m²
- ・調査担当者 石田成年

調査概要

光洋精工第2工場周辺には「尼寺」の地籍名が残り、河内国分尼寺がこの附近に造営されたと推される。調査対象地は、国分尼寺推定地の北辺にある。

調査は対象地の南辺に東西4.5m、南北1.5mの調査区を設定し、人力により現地表下120cm掘削した。

層序は上層から表土・盛土、灰茶色砂質土、灰色砂質土、茶灰色砂質土、灰褐色砂質土、黃灰色砂質土であり、何れも厚さ15～20cmで水平に堆積していた。各層ごとに遺構の検出に努めたが、全く認められなかった。

遺物は灰色砂質土層以下、各層において須恵器、土師器、瓦の出土があった。しかし細片ば

かりで、損傷も著しく図化できるものはない。

軒丸瓦も表面の磨滅が著しく、文様、調整等が判断としないが、複弁七葉になるかと思われる。瓦当（複元）径は16cm前後。色調は明灰色を呈し、1～3mmの石英を多く含む。丸瓦との接合方法は「印籠つぎ」である。

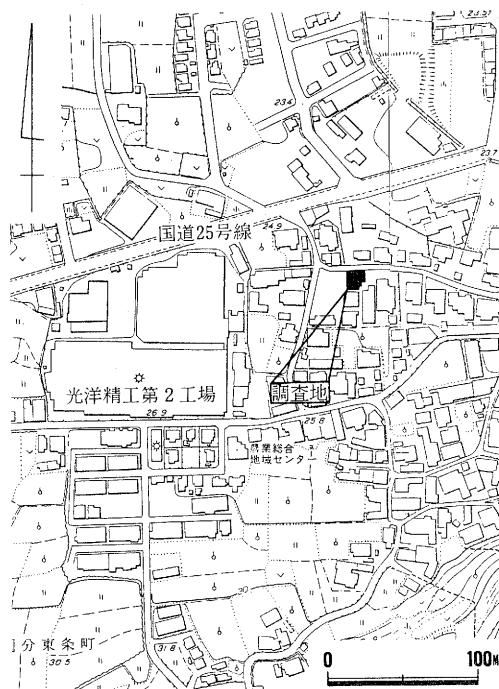


図-37 調査位置図（方位は真北）

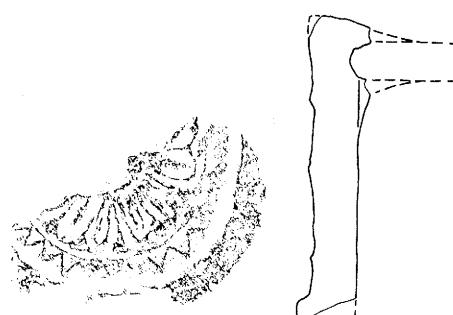
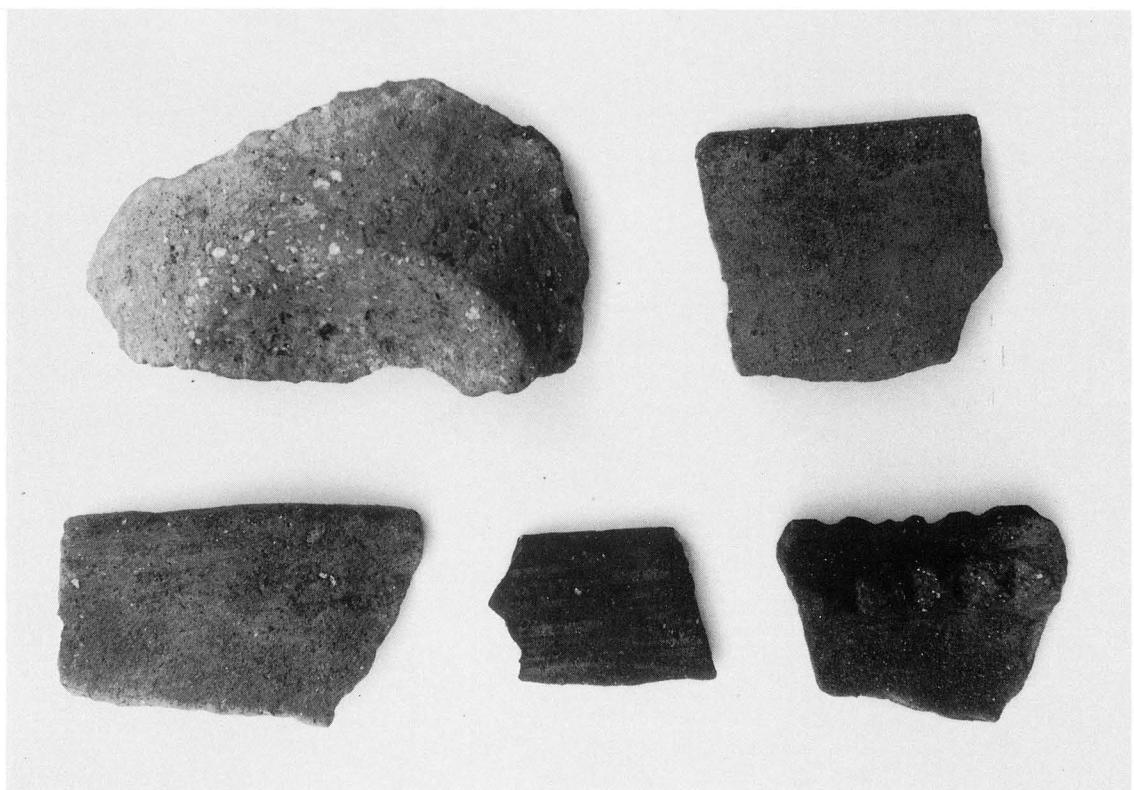


図-38 出土軒丸瓦 (S=1/4)

図 版



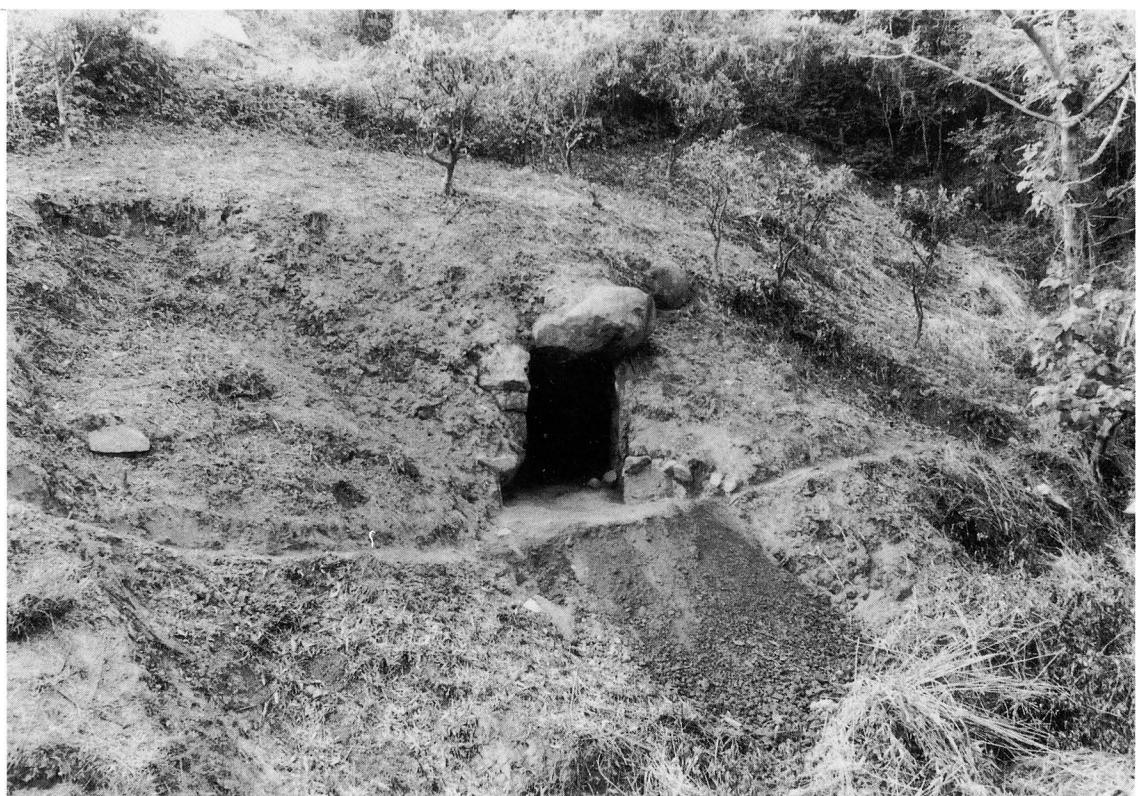
トレンチ



出土縄文土器



第5支群7号墳調査前状況



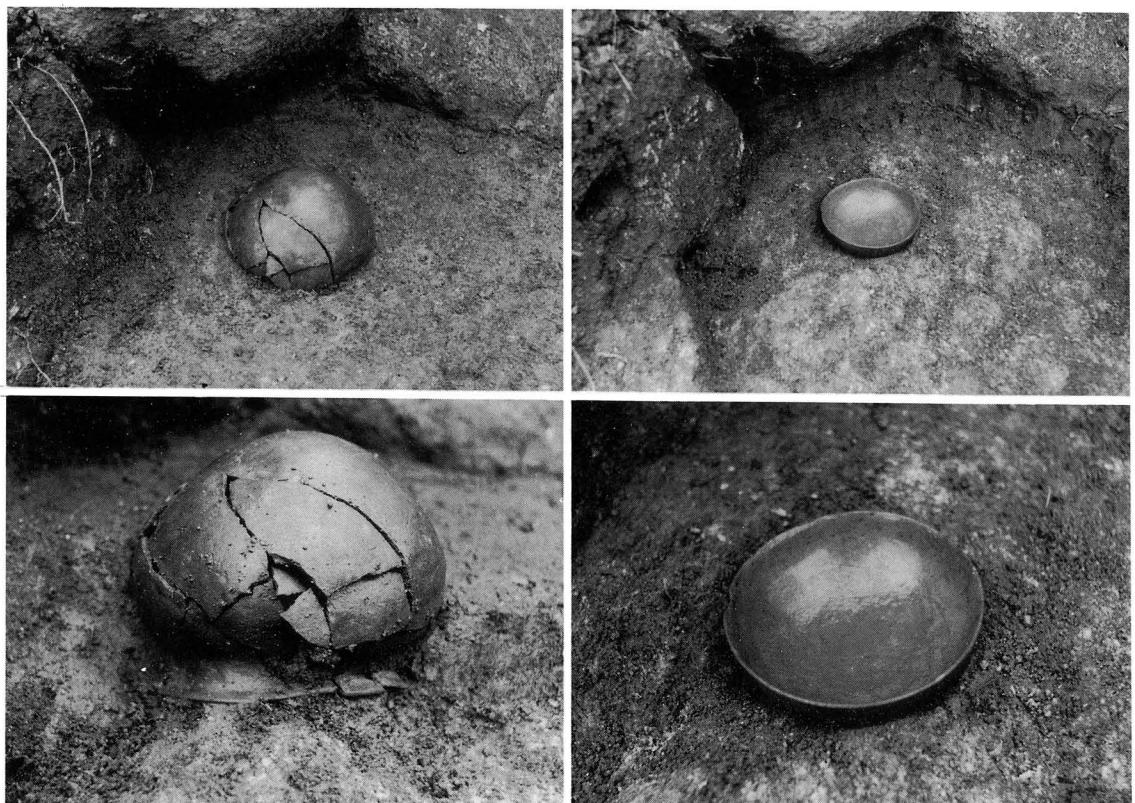
第5支群7号墳調査中状況



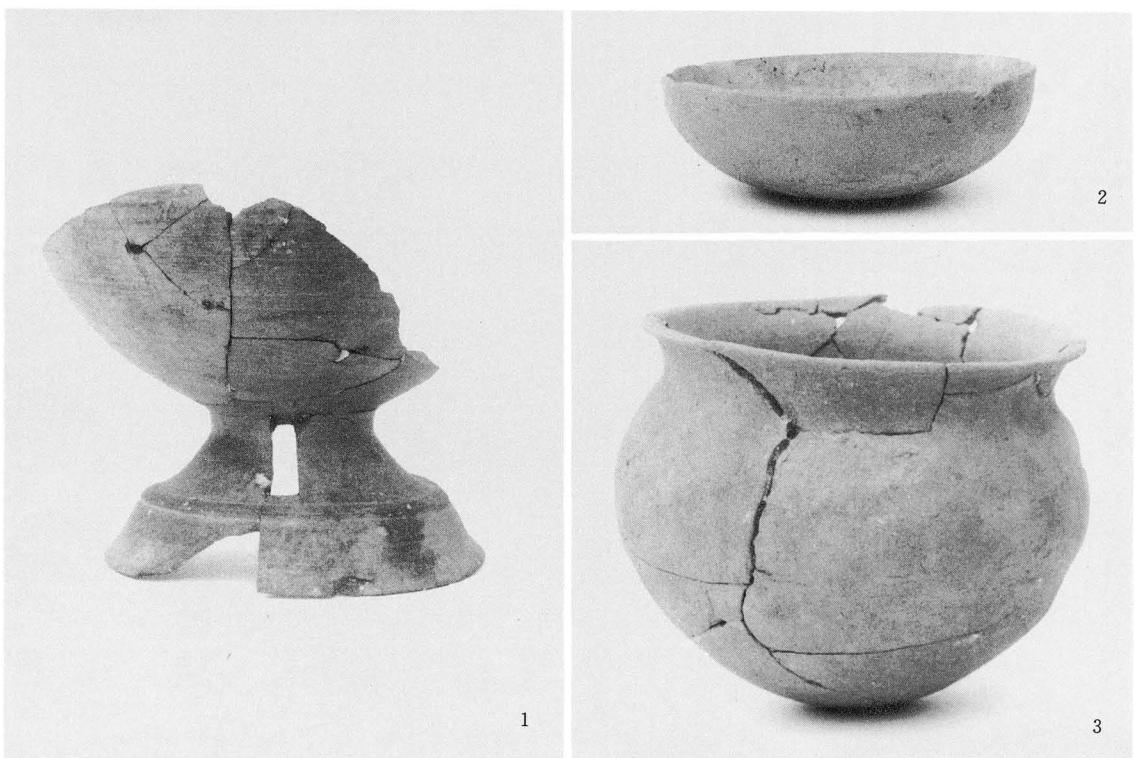
第5支群7号墳石室



第5支群7号墳石室奥壁



第5支群7号墳土師器出土状況



第5支群7号墳出土遺物



第1トレンチ



第1トレンチ土層



第5支群8号墳



第5支群8号墳石室



第2トレンチ



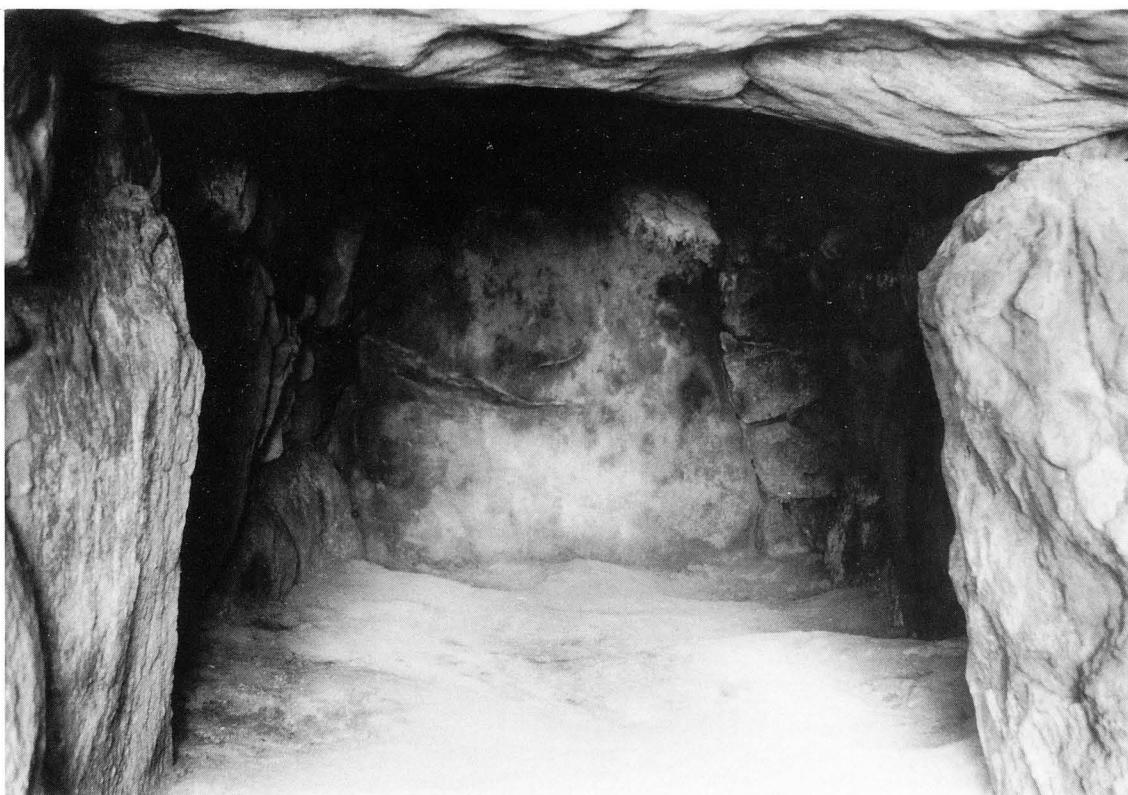
第2トレンチ



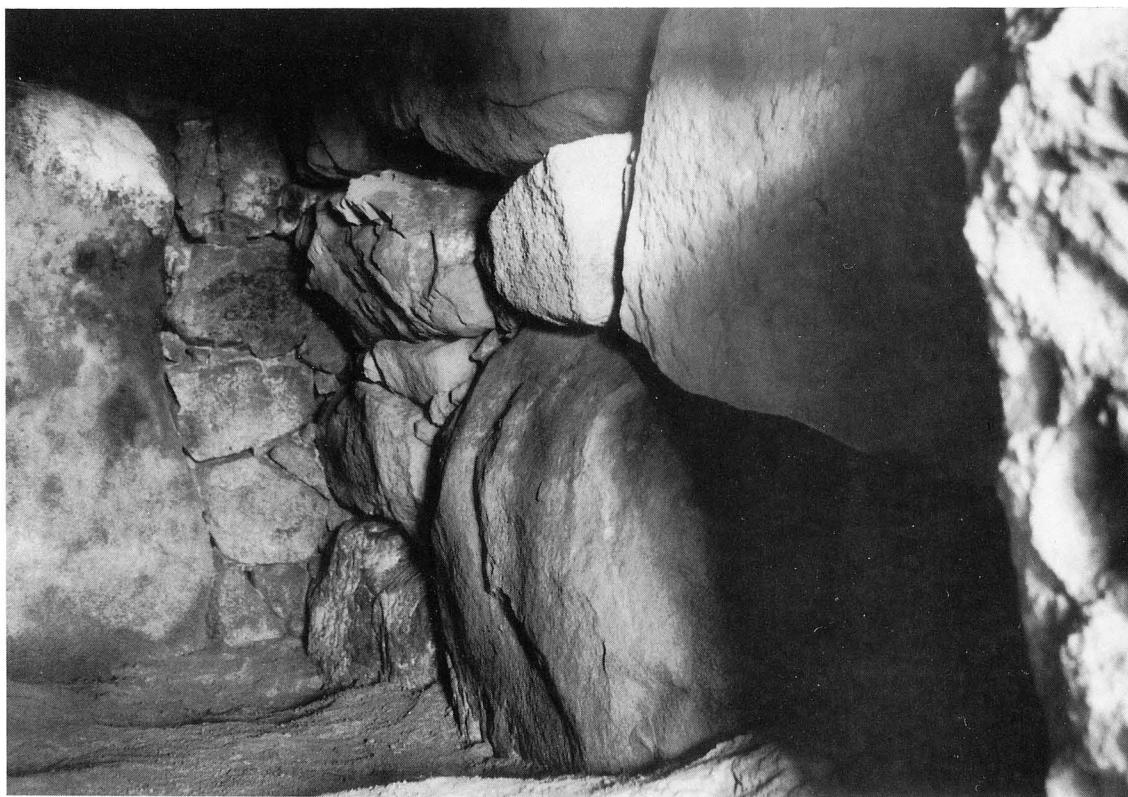
第15支群 5号墳



第15支群 5号墳



第15支群 5号墳石室奥壁



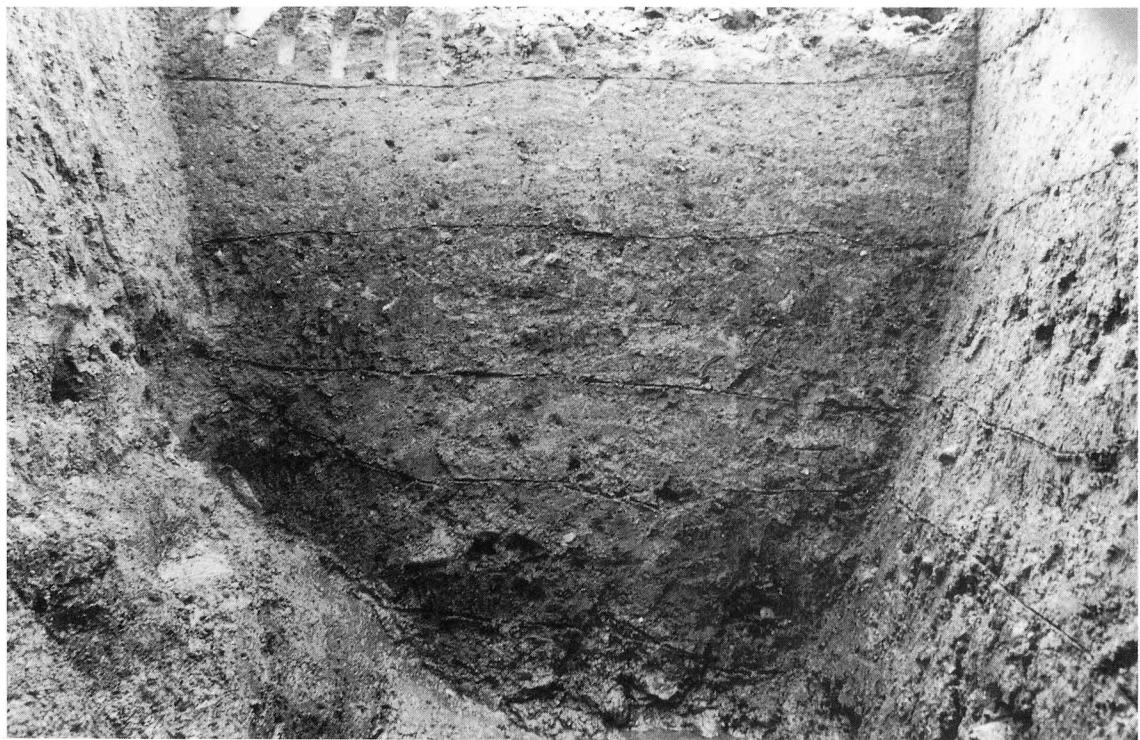
第15支群 5号墳石室左側壁



第3トレンチ



第4トレンチ

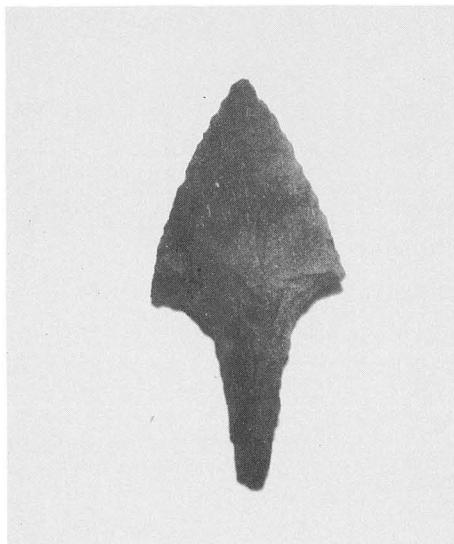
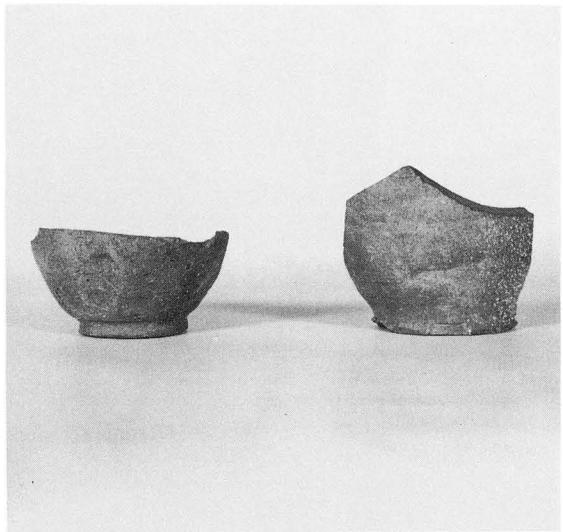


調査区西壁断面土層



調査西区（東から）

図版一二 安堂遺跡（87—2）



出土遺物



調査区南壁断面土層



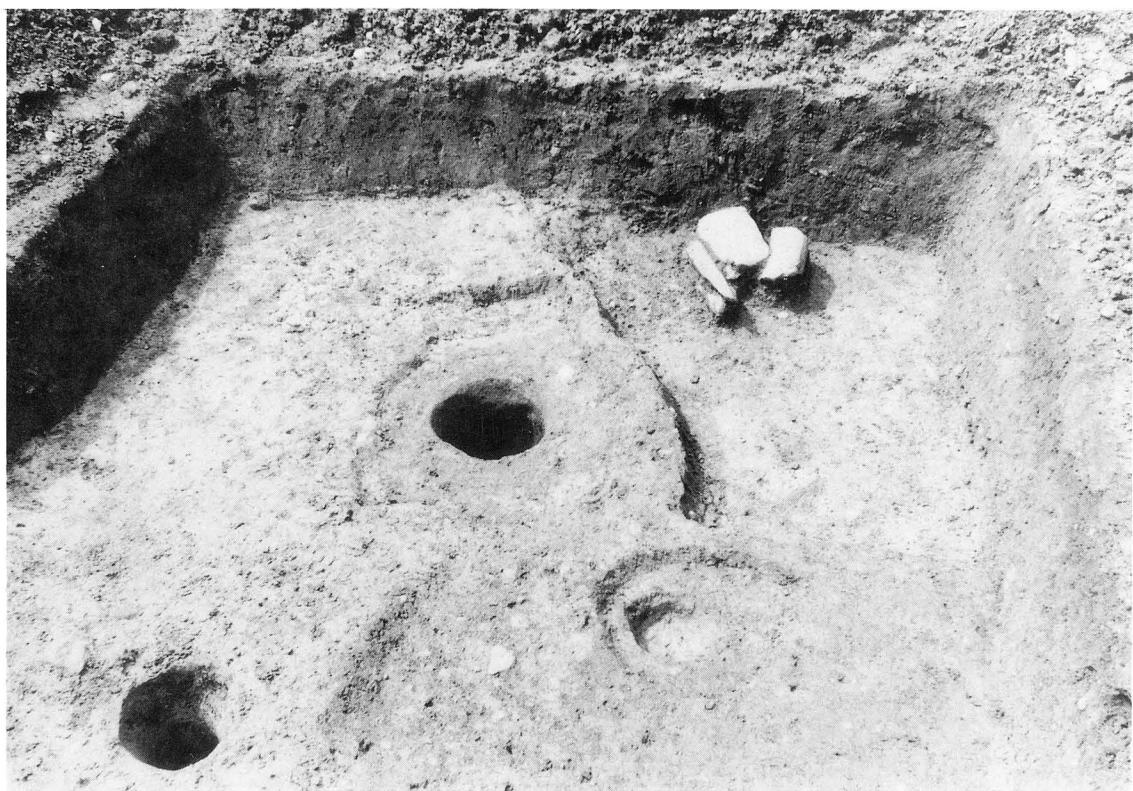
柱穴（完掘 西から）



南北トレントンチ



東西トレントンチ



遺構・北から



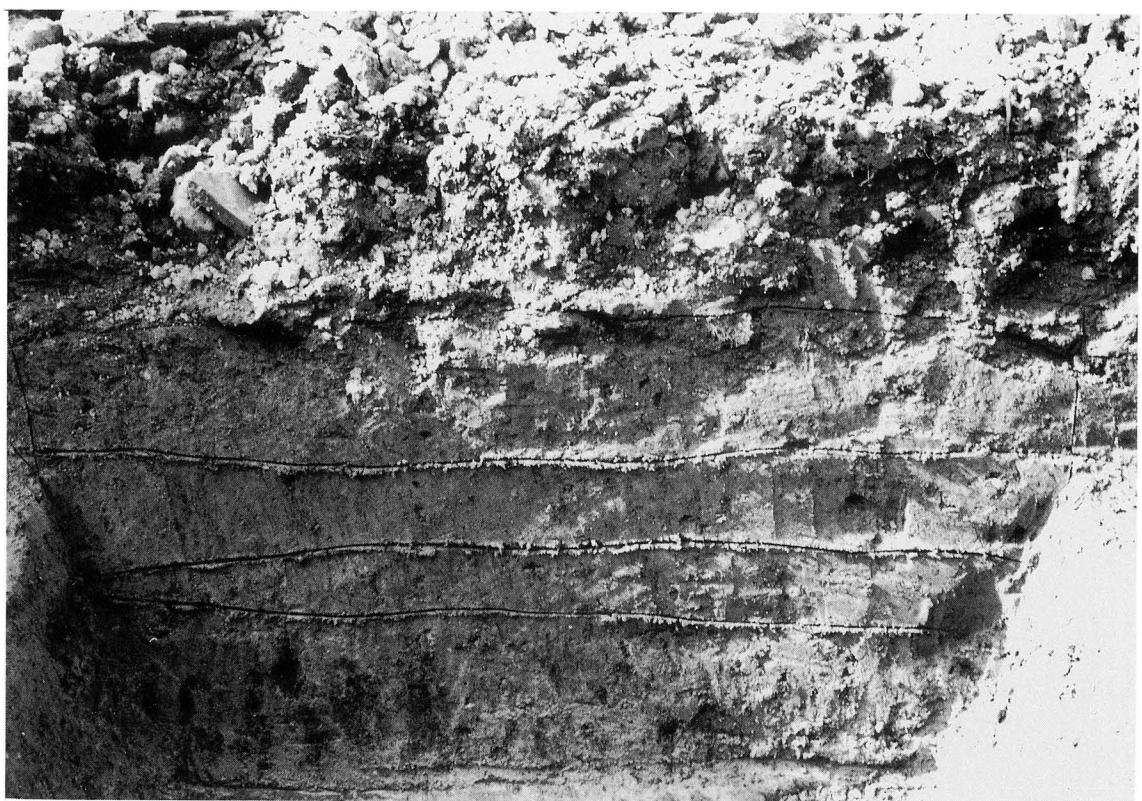
遺構・南から



調査区南壁断面土層



検出遺構（完掘 南から）



調査区北壁断面土層



出土軒丸瓦

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1987年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和63年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

